

わたしたちと生きる建築 Vol.2

2025年9月20日（土）13:30~16:30 埼玉会館 大ホール

主催：公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団
協力：株式会社前川建築設計事務所 東京都美術館



SEMINAR PROGRAM

第1部 前川建築がわたしたちに語りかけるもの
松隈 洋 (神奈川県立大学教授、京都工業繊維大学名誉教授)

第2部 生きる建築 東京都美術館の事例
市民と、あつめる、たのしみ建築
河野 佑美 (東京都美術館 企画調整課 アート・コミュニケーション係学芸員)
前川建築を継承するということ
橋本 功 (株)前川建築設計事務所 代表取締役所長)

第3部 トークセッション
登壇者、会場のみなさま

主催 (公財)埼玉県芸術文化振興財団
協力 (株)前川建築設計事務所 東京都美術館
埼玉会館WEBサイト www.saf.or.jp/aitama

埼玉会館 前川國男 建築セミナー 第12回

わたしたちと生きる建築 Vol.2

2025年9月20日(土)13:30-16:00
埼玉会館 大ホール
入場無料 定員300名(要事前申込)

登壇者プロフィール

松隈 洋 (まつくまひろし)
神奈川県立大学教授、京都工業繊維大学名誉教授
1957年兵庫県生まれ、1980年京都大学建築学系卒業、前川建築設計事務所入所、2000年京都工芸繊維大学助教授、2008年教授、2023年4月から現職、工学博士(京都大学)。専門は近代建築史、建築設計論。著書に『未完の建築 前川國男論』、『建築の前世 前川國男論』(2019年日本建築学会賞(論文)受賞)、『ル・コルビュジエから遠く離れて』、『ルイス・カーン』、『飯倉三三とはだれか』、『橋本=を建築』など、建築100年-前川國男建築展、DOCCOMOMO2025建築など多くの建築展に携わる。

河野 佑美 (こうの ゆみ)
東京都美術館企画調整課アート・コミュニケーション係学芸員(公益財団法人東京都歴史文化財団)
2006年武蔵野美術大学大学院造形学コース美術史修士。専門は造形学、2010-11年の東京都美術館大規模改修工事をきっかけに建築のプログラム(おやすみ都美術館建築講座)を企画・運営。その後、市民とのプロジェクト「とびらプロジェクト」(東京都美術館×東京藝術大学)や建築ツアーの企画運営を担当。現在は、心臓から始まることと、その保護者や生産者のミュージアム・デビューを促進する上野公園のつやの文化施設の連携事業「Museum Start あいうえの」の企画運営を担当。文化資源と「みる、かんがえる、はなす、まき」をベースにしたプログラムの企画運営を行っている。

橋本 功 (はしもと ことお)
株式会社前川建築設計事務所 代表取締役所長
1945年神奈川県生まれ、1970年日本大学理工学部建築学系卒業(株)前川建築設計事務所入所、1994年(株)前川建築設計事務所取締役、2000年代表取締役兼主任。著書に『生きる建築』、『前川國男建築設計事務所』、『埼玉県立自然史博物館』、『現・埼玉県立自然史博物館』、『国立音楽大学講堂』、『国立音楽大学付属幼稚園』、『付属中・高等学校増築』、『付属小学校』、『千歳児童福祉文化会館』、『埼玉県立玉野児童福祉文化会館』など。この間、私都市から熊本県までの、使われている全国の前川建築の保全改修や前川建築に関する様々な活動に積極的に携わり続けている。

申込期間 8月1日(金)から ※定員に達した時点で締め切りさせていただきます。

申込方法 下記①~④を明記のうえ、メール・申込みフォームいずれかの方法でお申込みください。
①氏名(漢字) ②氏名(フリガナ) ③電話番号 ④郵便番号
⑤住所 ⑥メールアドレス ⑦人数 ⑧同行者氏名

申込先 「埼玉会館・彩発見」担当 小澤・新井 宛
【メール】 info-kaikan@saf.or.jp
【申込みフォーム】 ORコードをご利用ください。

問合せ 「埼玉会館・彩発見」担当 小澤・新井
TEL: 048-829-2471 (休館日を除く10時~19時)

埼玉会館のご案内
〒330-8518 さいたま市浦和区高砂3-1-4 JR浦和駅(西口)より徒歩6分

- 記録目次 -

第1部 前川建築がわたしたちに語りかけるもの

~よりどころとなる場所を守り育てるために~：松隈 洋

「よりどころとなる場所」のきっかけは紀伊國屋書店	3
「都市のコア」を神奈川県立図書館・音楽堂で実践	4
学生の手による子供のための音楽堂体感ツアー	6
気軽に寄り集う場所となる世田谷区民会館と区庁舎	7
中庭が通り抜けられる京都会館は打ち込みタイルの原点	7
広場と外壁へのこだわりが岡山美術館へ、紀伊國屋ビルへ	8
いろんな思いが集中・消化した埼玉会館	9
エスプラナード誕生秘話	10
埼玉会館の優秀な設計チームは東京文化会館の設計で鍛えられていた	11
物があるけど物を感じさせないルーブルの庭に通じるエスプラナード	12

まずエスプラナードありきではじまる埼玉会館の建物	13
外部空間重視の発想と「破滅に向かう文明の進路是正」の思い	14
東京都美術館へつながる埼玉会館の設計思想	16
「素朴な材料で非凡な結果をつくる」熊本県立美術館にみる美術館の到達点	16
弘前中央高校講堂の椅子を自ら補修する弘前市民	17
中庭は市民が生きがいに思いを馳せる場に	18
市民が行き交うテラス	19
建築は使ってだんだん作品に成長していく	20
ル・コルビュジエとサン＝テグジュペリと前川國男の縁	21
「建築家とは、建築とは」を常に問いかけながら	21
次の世代に渡せる建築からまちづくりへ	22

第2部 生きる建築 東京都美術館の事例

市民と、めでる、たのしむ建築：河野 佑美

2年間の休館を前に、都美という建物に親しんでもらう	24
会話が弾む大盛況の建築ツアー	25
何かに出会って何かを感じる美術館を目指して「とびらプロジェクト」誕生	27
バラエティ豊かな講座で基礎体力をつける「とびラー」たち	28
とびラーのアイデア満載の建築ツアー	28
とびラー自身が楽しんで、参加者みんな巻き込まれる？	29
大人も子どもも障がい者もみんな一緒に楽しんでいる	30
建物が発するメッセージを受け止められる次世代に	31

前川建築を継承するという事～東京都美術館の改修事例を通して～：橋本 功

1926年開館の岡田信一郎設計の東京府美術館	33
新東京都美術館に求められた機能	34
前川建築を後世に継承するという大規模改修計画	35
現代にふさわしい機能が満たされた内部空間	35
打ち込みタイル再現の苦心・工夫	36
使い方の可能性が広がる展示環境の整備	37
3つのレストランとカフェにミュージアムショップの充実	38
前川オリジナルデザインの什器、家具、備品も丁寧に補修	38
前川建築を生かし続ける7つのデザイン・ボキャブラリー	39
前川建築には人の心を通わせる文化の営みが宿る	39

第3部 トークセッション：松隈 洋・河野 佑美・橋本 功・小澤 信子（進行）

専門家10人の話より一人ひとりの市民の口伝えが建築を生かす	41
建築物の写真撮影時の配慮と心得	41
建物を愛でる体験者が増える仕組みこそ前川國男の見たかった風景	43
大ホールの舞台上で音楽家としてスタート、最後はここでリサイタルを	43
知らず知らずのうちに前川國男の心に・・・	44
弘前市民の前川LOVE	45
ル・コルビュジエとサン＝テグジュペリと前川國男の縁	45

*本文中の資料写真や図表は講演で投影されたものです

*本文及び写真資料等の無断使用はご遠慮ください

第1部「前川建築がわたしたちに語りかけるもの」

松隈 洋（まつくま ひろし）

神奈川大学教授、京都工芸繊維大学名誉教授

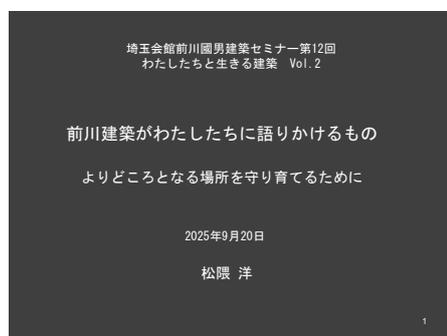
1957年兵庫県生まれ。1980年京都大学建築学科卒業、前川國男建築設計事務所入所。2000年京都工芸繊維大学助教授。2008年教授、2023年4月から現職。工学博士（東京大学）。専門は近代建築史、建築設計論。著書に『未完の建築 前川國男論・戦後編』（2025年毎日出版文化賞受賞）、『建築の前夜 前川國男論』（2019年日本建築学会賞（論文）受賞）、『ル・コルビュジエから遠く離れて』、『ルイス・カーン』、『坂倉準三とはだれか』、『残すべき建築』など。生誕100年・前川國男建築展、DOCOMOMO20選展など多くの建築展に携わる。

「よりどころとなる場所」のきっかけは紀伊國屋書店

松隈：松隈です。よろしくお願いします。感慨深いんですけど、僕が前川國男に初めて接したのは1977年、京都大学に前川國男が学生主催の講演会に来た時で、前川が72歳、僕が20歳でした。それからもう半世紀ぐらい経っちゃってるんですけど、前川國男が生誕120年ということで大きな節目になってます。今日は、前川の生前に全く聞くことのなかったことについて、宿題をやらされた人間がレポートを出す

みたいな話なんですけど、戦後を中心に、ちょっと副題で書きました「よりどころとなる場所を守り育てるために」ということについてお話をしたいと思います。

前川國男にとって、おそらく街の中に人々のよりどころとなるスペースをつくるひとつのきっかけになったのが、この紀伊國屋書店の木造の建物だっという感じがするんですね。出来た時にこういう肖像写真が残ってて、まだ42歳の若い前川です。



1

前川國男 1947年頃 紀伊國屋書店前にて 42歳



2

前川國男 紀伊國屋書店 1947年 撮影/渡辺義雄



3



4

『前川國男建築事務所作品集』工学図書出版社 1947年



5

(*1)渡辺義雄（1907-2000）写真家。新潟県三条市出身。新しい写真表現の夢を追いかけた人。都市風俗を躍動的に捉えたグラフ・ジャーナリズムの先駆。戦後、建築写真を専門とするようになり『伊勢神宮』をはじめとした数々の作品を発表。（<https://sanjo-rekimin-homarea.ip/homarea/watanabe-voshio/> より）



渡辺義雄(*1)さんが素晴らしい写真を残してくださっているんですけど、こういう建物で中が吹き抜けの空間なんです。実はちょうど20年前（2005年）、前川國男の生誕100年の展覧会をやった時に、神戸芸術工科大学の花田佳明さんの研究室に大きな模型を作っていたいただいたんですが、図面がちゃんと残ってなくて、こういう出版物のものしかなかったんで、周りが全くわからないから周りの様子を知らせてほしいって、花田さんに宿題を出されていろいろ調べたんです。ご存じのように、敗戦後のこの紀伊國屋の周りってというのは、とてもこの絵に描いたような広場があるような状態ではなくて、こういう写真が残っているように、もっとごちゃごちゃした下町のような

雰囲気だったんですね。でも前川は、やっぱりここにもうすでに、人々のための場所をつくろうという発想をされていてつくっていたことが読み取れるんですね。

これは多分、前川國男はずっと大事にしてたことを、この紀伊國屋が出来た頃書き留めています。「近代建築は人間の建築」だと。それをつくり上げるものは、要するに「在野の精神」なんだということなんですね。何かの権威だったりそういうものを頼りにせずに、日常の人々の生活の中から「在野の精神を大事にしながらつくり上げるもんじゃないか。そのことに自信を持っていかなきゃいけない」と。

前川國男の言葉 1948年

「近代建築は人間の建築である。その故にこそ近代建築を可能ならしめるものは人間への限りない愛情を本質とする『在野の精神』に対する深い理解と逞しい自信とでなければならぬ。 (...) 1947・12・1」

前川國男「刊行のことば」
『PLAN 1』雄鶏社 1948年2月

「都市のコア」を神奈川県立図書館・音楽堂で実践

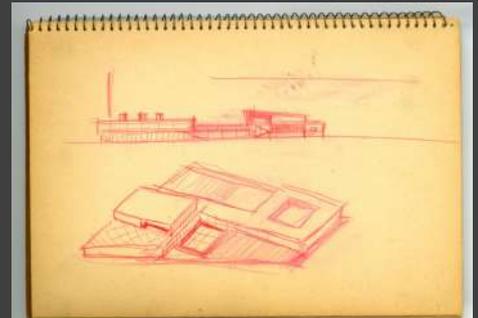
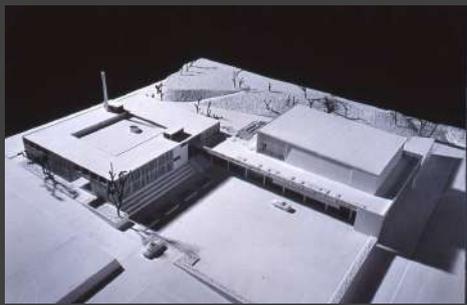
それで、この紀伊國屋が出来たすぐ後、1951年にロンドンで、国際建築家会議CIAM(シラム)の第8回が開かれて、この写真にあるようにコルビュジエと21年ぶりに再会を果たすんですね。この51年の会議のテーマが「都市のコア」。これは、どこまで確証を得られていることかっていうのは自信がないんですけど、明らかにこの「都市のコア」というテーマを、前川國男は日本に持ち帰って自分で実践するんです。

その帰った次の年にコンペが開かれて、一等を取っ

ル・コルビュジエと前川國男 1951年
ロンドンで開催された国際建築家会議CIAM第8回大会で21年ぶりに再会
この時のテーマが「都市のコア」だった。



神奈川県立図書館・音楽堂 1954年 撮影／イースタン写真



て実現するのが、この神奈川県立図書館・音楽堂になります。こういうスケッチが残ってるんですけど、実際に出来上がります。この図書館は、誰もが本棚に近づけて自由に手にとって貸し出しができる、戦前にはなかった戦後型の開架式図書館がここで生まれるわけですね。

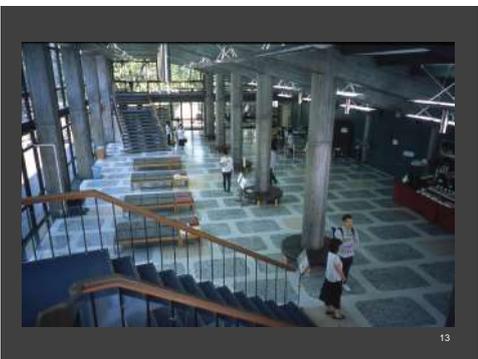
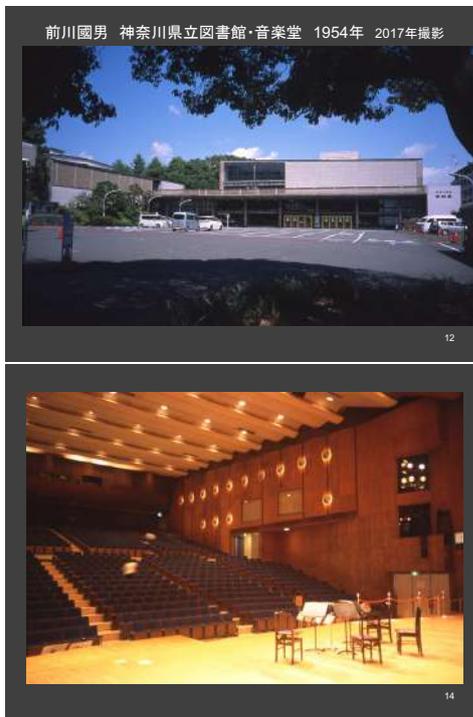
実はこの神奈川県立図書館・音楽堂っていうのは、隔世の感がありますけど、

1994~5年頃にあの地区を、すべて建物を取り壊して新しい芸術文化センターをつくらうっていう大きな計画が突然発表されて、結構大きな論争になりました。そこでピアニストでフェリス学院大学の山岡優子先生がご尽力され、シンポジウムをやったり音楽会をやったり見学会をやったりして、最終的には土壇場で、ちょうどバブル経済の崩壊っていうこともあったんですけど、それが突然、止めになった。

土壇場でこの建物が守られた後は、むしろ、それを大事にしていこうという動きが始まって、当時、音楽堂の館長だった伊藤由貴子さんが、こういう企画を立ててくださって。もうこれも11年前になりますけど、音楽堂が還暦を迎えた2014年に、シンポジウム

と見学会、コンサートがありました。

この時に実は印象的だったのは、藤森照信(*2)さんと内藤廣(*3)さんと僕と3人で座談会をやったんですけど、その時に藤森さんがちょうど前川の弟子の丹下健三の大きな本を出した後だったので、丹下健三と前川國男のことを比較しながらお話ししてたんですね。そしたら、この神奈川県立音楽堂の音響の設計をやられた石井聖光(*4)先生が会場に来ておられて、それで石井先生にも一言って振ったら、当時もう90歳を超えておられた石井先生が、前川國男と丹下健三を横に並べて比較するのはとんでもないことだって、結構お怒



神奈川県立音楽堂 還暦記念 建築見学会特別編 2014年



(*2)藤森照信 (1946-) 建築史家、建築家。東京大学生産技術研究所教授、工学院大学教授を経て、現在は、東京大学名誉教授、工学院大学特任教授、江戸東京博物館館長。(https://madoken.jp/authors/terunobufujimori/ より)
 (*3)内藤廣 (1950-) 建築家。フェルナンド・イゲーラス建築設計事務所 (スペイン)、菊竹清訓建築設計事務所を経て、1981年内藤廣建築設計事務所を設立。2001~2011年東京大学大学院にて、教授・副学長を歴任。(https://designcommittee.jp/maruhi/naito_hiroshi.html より)
 (*4)石井聖光 (1924-2025) 東京大学名誉教授。専門は、建築音響工学、騒音 (https://ja.wikipedia.org/wiki/石井聖光 より)

りの言葉をいただきました。前川國男ってのは、全然格の違う人だったんだよって話をしてくださったんですね。それで、内藤廣さんを含めて僕らがシュンとした。その後に仲道郁代さんがピアノの演奏を聞かせてくださったんですけど、これもすごくカジュアルなコンサートで、職員の方が膨らませた風船を会場の全員が手に持っている状態で、仲道さんが「ピアノを弾くときにこの風船で感じてください。これだけ音が響いて伝わってるんですよ。この音楽堂のホールの音の響きを体感してください」って。それを91歳の石井先生も手に持って、ニコニコしながら抱えてたんですね。その石井先生も今年百歳を超えられて亡くなられたところなんですけど、そういう思いもあるコンサートでした。

学生の手による子供のための音楽堂体感ツアー

その後、やはり伊藤館長が企画されて、「普段、コンサートに来る子供たち、あるいは家族連れに音楽堂全体を体感してもらって、それでなおかつこの建物のことを知ってもらおうっていう企画を立てたいから、松隈さん、手伝って!」「子供たち、小学生向けの見学ツアーをやってほしい」って言われました。それで、当時大学院生の学生4人とその仕事をやろうということになった。4月に入ったところで、新学期が始まってその学生4人を捕まえて「5月28日に、君たちに子供たち向けのツアーをやって



18



19

もらうことにしたから」と。とりあえず見学に行こうねって連れてって、伊藤館長のご案内で隈なく見せていただいて。僕は音楽堂のことは多少調べていたのでファイルを5冊ぐらい渡して、「あとは頑張るね」って学生たちに任せました。そうすると、本番が用意されているので、何も言わずに学生たちが一生懸命勉強して、特に松岡さんっていう女子の学生がこういうことが得意で、小学生向けに、建築の難しい言葉を使わずに自分たちの撮った写真とイラストを使ってこういうガイドブックというか、パンフレットを作ってくれたんですね。ここまでのものを作ってくれと思わなかったんで、びっくりしたんですけど。彼らに聞くと、一番緊張したのは、実はリハーサルで伊藤館長の前で見学ツアーをやったことだって言っていましたけど。実際に本番をこういうふうにやりました。これは、いいきっかけをいただいた



20



21

なと思いました。建物そのものを使って何かをそこで仕掛けるっていうのは、学生たちにとっても得難い経験になったし、僕が講義しているよりもよっぽど勉強するし、本当にすごい収穫で感慨深かったです。みんな社会人になって、今活躍してます。

それでこの音楽堂で、いわゆる都市の中に広場的な場所をつくらうっていう、ロンドンで前川が持ち帰った宿題をひとつ手がけたんですね。

気軽に寄り集う場所となる世田谷区民会館と区庁舎

そのすぐ後で、世田谷の区民会館と区庁舎のコンペがあって、ここでさらに前川がその広場っていうものをどうつくるかっていうことにチャレンジするんですね。不整形な、住宅

地の中のどこが正面かわからないような敷地で、どこからでも人がやってきて、真ん中にその広場を囲んで自由に出入りができる。そういうよりどころになる場所をつくらうということで、このコンペをやった。今は残念ながら、舞台と客席だけを残して全部が建て替えられてしまっ

ずいぶん前ですけど、こういう状態の、子供たちの楽しそうな広場の様子が展開されていまして、この向こう側、奥が明るい中庭になっていて、そこで子どもたちがサッカーに興じてるっていう風景がありました。こうやってロンドンで語り合った「都市の中に人々が気軽に寄り集う場所」をどうやってつくらうかっていうことに、前川はどんどん応えていくんですね。

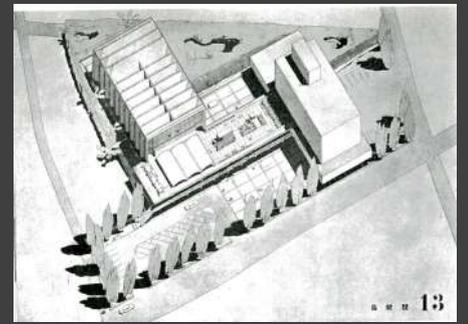
1951年というのは象徴的なんですけど、その前の年に戦時中から続いていた、建築の、戦争に向かっての資材統制が解除された。それで、鉄筋コンクリートや鉄骨を使って技術開発をすることがようやくできたので、ちょうど帰ってからずっと10年ぐらいかけていろんな工法を、基礎的なことを試していくんですね。

中庭が通り抜けられる京都会館は打ち込みタイルの原点

この世田谷と同じ時期に、やはり指名コンペで選ばれて出来上がるのが、この京都会館という建物で、世田谷とほとんど親子みたいな関係になっています。ここも中庭を囲んで自由に通り抜けできるような場所になっていて、本当に伸びやかな、こういう広場的な場所が街の中に誕生したわけです。これも前川が亡くなった後に所長室から出てきた京都会館の



22



23



24

世田谷区民会館 中庭 1997年撮影



25



前川國男 京都会館 1960年 2010年撮影

26



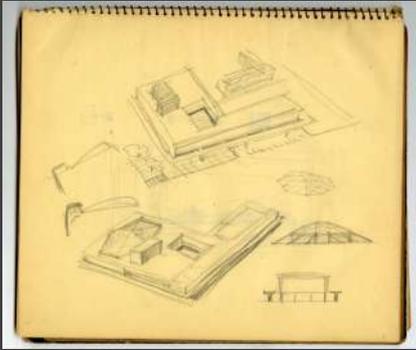
27



28



29



30

京都会館で使われていた珧器質ブリック
京都工芸繊維大学美術工芸資料館蔵



31

京都会館で行われた最後の吹奏楽コンクール風景 2011年8月3日



32

スケッチなんですけど、明らかに広場を中心としてどういう場所をつくり上げるのか、それから、水平線を強調して景観に配慮した建築をつくるのかっていう発想をしていることが読み取れます。

特に、世田谷ではコンクリートの打ち放しで全部まとめていたんですけども、京都会館の場合にはそうではなくて建物をプロテクトする、時間に耐えられるような素材を見つけるっていうことで、前川國男が初めて、外壁の外側に焼き物のブロックを積み上げるわけですね。これは、現物をお譲りいただいて、元の僕の大学の資料館に入れたんですけど、かなり重たいブロックで、まだこの埼玉会館で実現するような打ち込みタイルの前のタイプです。コンクリート・ブロックのような厚いブロックを外壁の外側に積んでいくようなやり方でした。

多分この櫨も、出来た時に建物を、道路の境界線、敷地の境界線から柱間の8mの倍の16m後退させ、そこに植えた。櫨が育って、ゆくゆくは建物が木陰に隠れるような、時間のことも含めてこの京都会館ではデザインされていたんですね。

広場と外壁へのこだわりが岡山美術館へ、紀伊國屋ビルへ

そういう蓄積があって、岡山から新築の本格的な美術館（現・林原美術館）をつくり始めるんですね。これも大事に使っておられて、2年前に国の登録有形文化財に決定されています。

前川國男 岡山美術館(現・林原美術館) 1963年
*2023年 国の登録有形文化財に登録されることが決定された



33



34



35

ここでは小さな建物だったということもあり、香川県の観音寺市にあるレンガ工場で、焼き過ぎのレンガで、ひん曲がったり色がおかしくなったもの、くずレンガって呼ばれるものをもらってきて、京都会館と同じように積み上げるっていうんですね。やはり外壁そのものが建物を守りながら時間の中でゆっくりと成熟していくような、そういう建築ができないのかっていうことを一生懸命考えてたわけです。そしてここでも、ロビーと庭がひとつづきになっているような形をつくっています。

本格的にこの埼玉会館に近い形で打ち込みタイルっていうものが使われたのが、この紀伊國屋ビルディングですね。ちょうど埼玉会館が出来た2年前になります。この写真のように周りが全部建て替えられてしまいましたけど、この紀伊國屋はもう60年以上ここに同じ形で残って大切に使われています。

前川は、紀伊國屋の木造の最初の建物を手掛けた時の田辺茂一さんと、奇しくも同い歳なので今年、生誕120周年になるんですが、その信頼関係があってこそ、こういう提案がおそらく許容していただけたんだと思うんですけど。ショップ・フロントの一番大事な地上の部分に、「人々が雨宿りできるような、あるいは待ち合わせができるようなそういう場所をつくろうよ」っていうことになって、こういう形で今でも使われているんですね。本来だったら例えば、「隣のビルや向かいのビルが、そうか、ああいうふうにしていくと町がどんどん良くなるよね。じゃあ僕たちも少しそういうふうやっていこうよ」ってことになれば、多分少しずつ街が良くなっていったんでしょうけど。残念ながら、前川に続く人が出てこなかったっていう現状があるわけですね。



前川國男の言葉 1964年

「この新しい建築に入居されるテナントの方々総数は40近いことを思えば、この建物をつくることそれ自体、小さな町づくりであるといえましょう。私共がこの建築の実現にあたって当面したいろいろな困難な問題は、そのまま現代都市の建設にわれわれの直面する困難と障害の縮図のようなものであったといえます。(…)
われわれは渴ききった砂をかむような町の中に、何か一息つける場所をつくりたいと随分考えた心算です。」

前川國男「設計者の言葉」
『紀伊國屋ビルディング竣工記念パンフレット』1964年

38

そのことをやっぱり当時、竣工パンフレットに書き留めてまして。「渴ききった砂を噛むような街の中に、何か一息つける場所をつくりたい」。おそらく、新宿は今もすごいことになってますけど、都市の大開発、建築がどんどん出来てくる時代の中で、「なんかそういう場所にちょっとでもいいから一息つけるみんなの場所をつくろうよ」、そういう思いでつくってる。それを打ち込みタイルっていう、試作を始めてようやく手応えを得た、語りかけるタイルというものを使って包み込むということをするわけですね。

いろんな思いが集中・消化した埼玉会館

そういうような蓄積を持って、この埼玉会館が出来上がってたっていうことから、ここにはいろんなものが集中して消化されてるんだなということに気がきました。資料を見ていて一番驚いたのが、設計期間が短時間なんです



39

ね。今お話しした岡山の美術館ができた頃に設計が始まったようなんですけど、わずか8ヶ月しか設計期間がなくて、ものすごい早さでつくられているんですね、建物が。

これがなぜ可能だったか。5年前に東京文化会館という本格的なホールをつくるのができたわけですけど、東京文化会館もこの埼玉会館も地下の部分がすごく多いんです。それで東京文化会館の時に、地下の穴を掘ってる間に上の設計をやればなんとかなるっていうことで、その工事中にすでにもう設計も並行して進めるような、そういうことをやらないと間に合わないみたいな形でやっていたんですね。多分、埼玉会館もそういう形で進めたんだと思います。

当時の記録はないんですけど、東京文化会館もこの埼玉会館も、実は発注者である都や県の営繕の技師の人たちがかなり尽力されて、自由度の高い、建設しながらも設計が進められる、変えていけるような、そういう柔軟なことをやられたんだと思うんですね。そのぐらいこの建物には、建築家だけが頑張ったわけじゃなくて、依頼者である埼玉県が非常に思いを持って尽力されたってことがわかります。当時のことを書き留めた方の文章はあったんですけど、打ち合わせだけで200回以上やったっていうことが残ってます。

エスプラナード誕生秘話

これも1965年に入所されるまで25歳の中田準一さんが、入所早々に「あと来年まで少し時間があるから、同じ枚数の赤と茶色のタイルを焼いといたから、これで外の床を考えなさい」と言われて。中田さんはすごく困って、そんなに考えるアイデアなんか出てくるのかって、すぐネタ切れになってノイローゼになっちゃみたい。前川さんはしばらく見てもくれなかったって書き記しておられますけど。そうやって本当に苦心の作としてできたのが、この床のタイルの模様

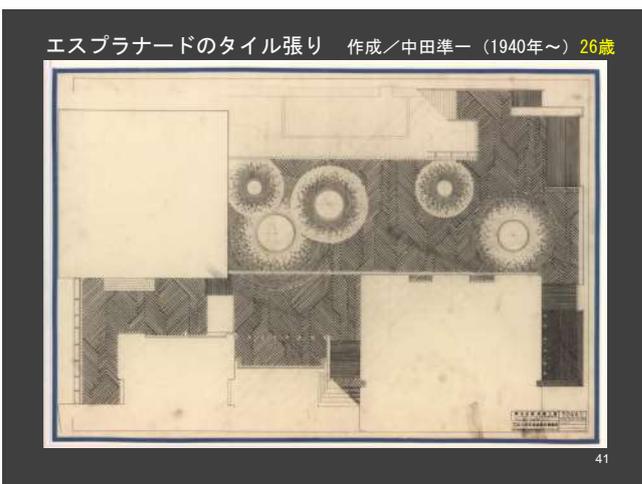


ですよね。こういう辛苦の結晶で、中田さんがこれを書き上げたときに、まだ26歳という若い年齢でした。

こういう形で非常に高密度につくって、ほぼ地下に埋めたりして、その屋上部分を使って、街の中にどうやって人々が寄り集う、自由に行き来できるような場所、広場をつくり出そうかっていう、かなり大胆な発想でつくられているわけですね。

残念ながらこれ、竣工パンフレットには前川國男の言葉がちょっと残ってないようなんですけど、新聞社のところに当時書いた前川國男の言葉が残っていて、こう書いてあるんですね。「敷地に不相応な

大きい要求をうまく満たすと同時に、浦和の町に市民にとって『なつかしい』ひとつのオアシスにも似た『ランデブー』を創り出したいと苦慮した」と。この『ランデブー』っていう言葉、ちょっと辞書で調べたら、もちろん逢い引きの場所っていう言葉もあるんです





前川國男の言葉 1966年

「私達は此の埼玉会館で、敷地に不相応に大きい要求をうまく満たすと同時に、浦和の街に市民にとって『なつかしい』ひとつのオアシスにも似た『ランデブー』を創り出したと苦慮しました。」

前川國男「設計者のことば」
『日刊建設通信』1966年5月27日

rendez-vous : 会合の場所、集合地、逢引の場所、気の合う仲間の寄り合う場所
『スタンダード仏和辞典』大修館書店

42

43



44

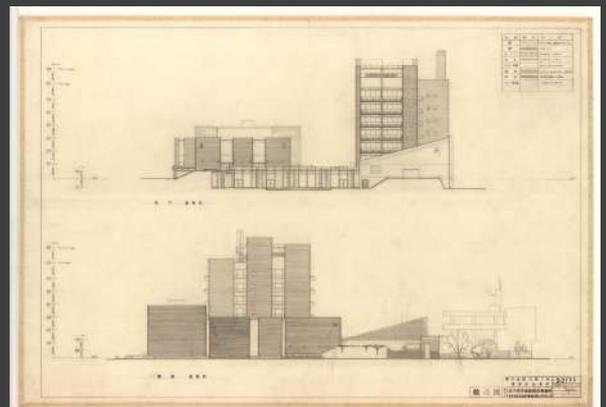
けど、気の合う仲間の寄り添う場所っていう、むしろそっちに多分、前川の思いがあったんだと思うんですけど。

埼玉会館の優秀な設計チームは東京文化会館の設計で鍛えられていた

これも写真しか残ってないので、現物がもしかしたら埼玉県庁のどこかに残ってないのかなと思うんですけど、出来上がった時に、前川を筆頭に全員の名前がサインしてあるんですね。出来た時にまだ前川は61歳でした。一番お尻に26歳の中田さんがいるんですけど。建築の人間11名、それから設備と構造の、これだけの人間たちが400枚ぐらいの図面を書いて仕上げたってことです。本当に集中力を持ってこれができたのも、優秀なサッカーチームを前川さんが戦後、育て上げたっていうふうに思っていて良くて。

いろんな小さな仕事から、スタッフたちをどんどん鍛えていって、それでひとつの大きな達成をしたのは東京文化会館で、延べ6万時間かけて設計をした記録が残ってるんです。その優秀なチームができたおかげで、8ヶ月って非常に短期間ですけど、これだけの密度のものが出来た。なおかつ、街の中にいかに人々のよりどころとなるような公共的な場所をつくるかっていうテーマがずっと一貫している。それで打ち込みタイルっていう確かな外装材、あるいは床のタイルもそうですけど、人間に対して語りかけるような、そういう素材の開発が終わって紀伊國屋でも2年前、実践ができていた。そういうことをすべてここに集約して作り出したのが、この埼玉会館なんですね。

これもちょっと感慨深いんですけど、中田さんより少し上の早間玲子さん。横浜国立大学の建築学科を出て事務所に入所した人で、実は埼玉会館のこの立面図に「早間」ってサインが入ってて、非常に力のこもった図面を彼女が書いたんですけど。この埼玉会館が出来た年にフランスに渡りまして、前川國男の紹介で、前川とアトリエの同僚だったシャルロット・ペリアンっていうデザイナーのもとに学び、そ

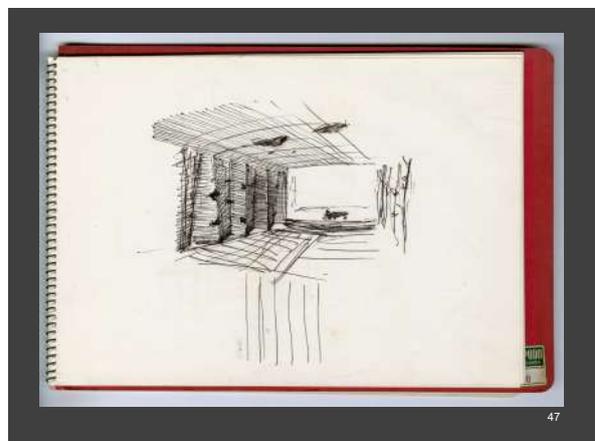
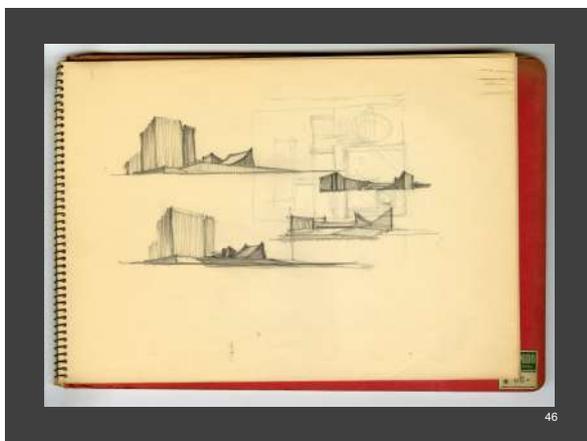


の後、ジャン・プルーヴェ(*5)っていう人に学んで、早間さんはそのまま帰国せずにフランスで、フランスの建築家の資格を取得して、現役でずっと活躍されていたんです。僕も来日された際に京都でお目にかかりましたし、その際、前川とペリアンとプルーヴェに学んでフランスで活躍している人っていうのは、非常に歴史を目撃してきたので、早間さんに自伝を書いてくださいよって勝手にお願いしてたんですけど。実は、みずず書房さんで早間さんの自伝を出す予定があって、お元気だから大丈夫でしょうって編集者の方がおっしゃってたら、今年の1月に突然亡くなられちゃって。その自伝、できればぜひ発刊していただきたいなと思ってちょっとご紹介しました。

物があるけど物を感じさせないルーブルの庭に通じるエスプラナード

前川國男のスケッチも、残っています。これも面白いんですよ、建物の外観のことはあんまり気にしてなくて、どういうふういろんなボリュームを集めて街の中にかっこよく置くのか、みたいな、そういうことを一生懸命考えている痕跡があります。この大ホールのスケッチも残っています。

それで、やっぱり前川さんがしゃべっていることは面白いなと思ったんですけど。埼玉会館がいくつかの建物に囲まれて、広場を包んでるっていう形の根拠が何かって聞かれて、「コルビュジエのアトリエにいた時に、ルーブルの美術館の庭を横切っているバスに乗っていた。その時にコルビュジエがこんなこと言った。物があるんだけど、その物を感じさせない、しかも何か包み込まれているような感じがここにはあるだろう。こりゃいいなってことをしきりに言うんだ。なるほどと思ったんだ」と。これ、ずっと覚えてるわけです。コルビュジエっていうのは、新しいもの好きだったわけじゃなくて、古い建物でもその良さをちゃんと吸収する目を持っていて、それを前川に語ってたわけですね。1928年から30年の間に語られたこの内容をずっと前川は温めていて。だから「埼玉会館を頼まれたときに、後ろに」これも、すごい言葉が悪いんだけど、「あまり上出来とは言いがたい図書館がある。あの前に建物を建てて隠しちゃうかっていう誘惑にちょっと駆られたんだけど。あれにも一役買わせてね、なにかで囲まれた空間ができた方がいいんじゃないか」ということで、「それで思い切ってあれを出しちゃったわけですよ。そのことは僕は良



(*5)ジャン・プルーヴェ (1901-1984) ル・コルビュジエをはじめとした数々の建築家たちとの協業を通じ、独自に建具や建築のあり方を開発。自身を建築家やデザイナーではなく、あくまでも工場働く職人だと認識。量産可能な家具づくりと効率的な建築システムの開発に尽力し、20世紀デザインの工業化に大きな影響を及ぼした。(https://r100tokyo.com/curiosity/essence/jeanprouve/ より)

「私はね、戦前にコルビュジェとルーヴルの庭（…）を横切ってバスが通っている、そのバスに偶然乗り合わせていたの。そしたらコルビュジェが僕にね、このスペースがとてもいいんだという。つまり、物があるんだけどその物を感じさせない、しかもなにか包み込まれているような感じがここにはあるだろう。こりゃいいなってことを、しきりに僕に言うんだ。なるほどと思ったんだな」

「対談・建築家としての展望はあるか 前川國男＋宮内嘉久」
『続・現代建築の再構築』彰国社1978年

48

エスプラナードで試みようとしたこと

「埼玉会館を頼まれたときに、あの後ろに（…）あまり上出来とは言いづらい図書館がある。あの前に建物を建てて隠しちまおうかっていう誘惑にちょっとかられたんだけど（…）あれに一役買わしてね、なにかで囲まれた空間ができた方がいいんじゃないかと思って、それで思い切ってあれを出しちゃったわけですよ。そのことは僕はよかったと思ってる。館長さんはひじょうに感激してお礼を言われたけどもね。図書館も、あのエスプラナードのおかげでとても感じがよくなったですよ、中から見ると。ほんとに。」

49

かったと思ってるし、図書館の館長さんも非常に喜んでくれた。図書館もあの（広場）エスプラナードのおかげでとても感じがよくなった、中から見ると。ほんとに」この図書館は、残念ながらこの数年前に壊されてしまってなくなっちゃったんですけど、僕はまだある時に行って一番感動したのは、あの2階のテラス、建物の前のバルコニーのところから、このエスプラナードの広場を見返したあの時の印象がすごく強かったですね。

まずエスプラナードありきではじまる埼玉会館の建物

それから、こういうのも面白いなと思うんですけど。先ほど紹介したロンドンの会議で「都市のコア」っていうことをテーマにした時の議長が、スペインからやってきたホセ・レイ・セルトっていう建築家で、彼は実はあのバウハウスの創始者のヴァルター・グロピウスがハーバード大学の先生になっていたことで1939年にハーバードに呼ばれ、戦後に、大学院にアーバンデザインのコースをつくるんですね。その第一期生として入学してきたのが榎文彦さん。昨年6月に亡くなりましたけど、榎さんはセルトのところに行った時に、前川國男は元気かい？って聞かれるし、日本に帰ってきて前川國男のところに行くと、セルトはどうしてる？っていうふうに聞かれたっていうんですね。

ちょうどこの66年の埼玉会館の時期っていうのは、30代の榎さんがアメリカから帰ってこられて、自分の事務所をつくって、代表作となる代官山のヒルサイドテラスとか、その前の立正大学の熊谷の校舎、あれも全部やっぱり群と広場の構成になってるんですけど、それをちょうど手がけてたんです。それで、その榎さんにこの埼玉会館の批評文を、「新建築」の編集者が書かせてるんですね。榎さんが非常に的確にこの埼玉会館の特徴を捕まえておられて。「画期的と思われる点は・・・エントランスが広場と広場のレベル差を利用してほとんどなに気なく、・・・構成されている」。そうですね、仰々しいこの大ホールに入るエントランスのロビーの入り口は、ここが入り口だぜって威張って見えている形ではなくて、段差の隙間がガラスのスクリーンになっていて、そこが入るところに。つまり、そのぐらい自然な形になっている。それから、非常にこの外部空間が活着していると考えるんだけど、これが面白いですね。「建築があつての外部空間ではなくて、外部空間が先に発見されてデザインされて、その周りに建物が取りついた」地と図が反転しているということですね。広場をまずつくって、この下にホワイエを入れて、その周りにどういふふうに建物を集めてくればいいのかっていう発想でつくられているところが、非常に画期的なんじゃないかって、榎さんが指摘してるんですね。

これも大事なことを言っておられて。「遊離したその囲まれた庭とかそういうんじゃなくて、浦和の町につながりながら、よどみとしての広場という実感を訪れるものに等しく与えてくれる、ほとんど最初の日本

榎文彦（1928～2024年）による評価から

「この会館が、画期的とも思われる点は（…）入口が、広場と広場のレベル差を利用してほとんどなに気なく（…）ガラス・スクリーンで構成されている点である。（…）広場を中心に展開する空間とビスタは（…）独自の主体性をこの外部空間に与えている。換言すれば、建築あつての外部空間でなく外部空間が先見され、デザインされ、そのまわりに建物が取りついたといった感じすら（…）与える自然さがそこにある。」

「遊離した庭ではなく、より密実に浦和の町につながりながら、しかしよどみとしての広場という実感を訪れるものに与えてくれる、ほとんど最初の日本のひろば」であり、「市民の財産でもある文化センターが、単に催し物の場を提供するだけでなく、こうした広場を通して市民に昼夜憩える外部空間を同時に提供してくれるならば、その価値はほとんど半永久的なはかりしれないものがある。」

槇文彦「公共空間へのアプローチ」
『新建築』1966年7月号

51

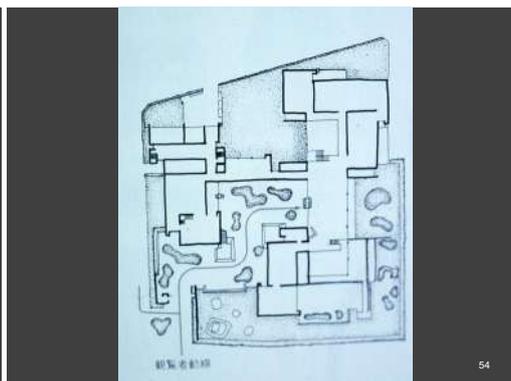
のひろば」であり、こういうものが「催し物の場を提供するだけじゃなくて、広場を通して市民に昼夜憩える外部空間を同時に提供してくれるならば、その価値はほとんど半永久的なはかりしれないものがある。」これが多分、前川も考えたことですし、槇さんもこういうことを大事にしながら、自分の仕事も進めようとしたんじゃないかなと思うんですね。

外部空間重視の発想と「破滅に向かう文明の進路是正」の思い

それで埼玉会館で埼玉県との信頼を非常に強くしたということもあったんだと思うんですけど、ちょうど5年後の1971年にもうひとつ、埼玉には前川の代表作になる埼玉県立博物館（現・埼玉県立歴史と民俗の博物館）が出来ます。都市的な場所の浦和と違って、大宮公園の緑豊かな公園の中だったってということも大きかったと思うんですけど。それから、高度経済成長から万博、オイルショックという時代に移り変わる中で、前川が建築の考え方を変えていく時期にちょうど当たるんですね。ですから、既存の樹木をなるべく残しながら、槇さんが書いているように、建物が主役ではなくて、むしろその外側に広がる環境との関係を考えながら、建物を逆算して置いていくみたいな形に変わっていきます。

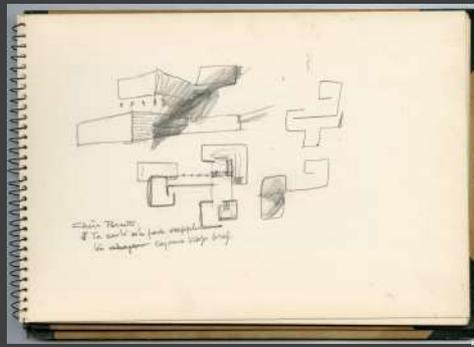
それで、ジグザグに入って行って、入った先が大きなロビーになっていて、そこはガラス張りで中と外がツーツーになっています。そこから展示室が枝分かれして、その展示室の先にもそれぞれのところに庭が取られているという景色になる、こういう状態をつくり上げていくわけです。

これは前川國男のこの後の建築に共通してるんですけど、コンクリートの大きな架構で覆われたところはガラスのスクリーンになっていて、中と外がひと続きになっています。床とか壁が、内部と外部が同じ材料でつながっていく。どこからが中でどこからが外だっただけではなくて、全体がひとつの関係をつくるっていう考え方になっていくわけですね。これもスケッチブックでこういうものが残っていました。





56



57

前川國男が考えていたこと

「美しい大宮公園の環境にどのような博物館を建てたら良いのか。博物館のこの敷地に於ける『たたずまい』とその建築素材の選定にいささか心胆をくだいたつもりであります。」

前川國男「設計者のことば」
『埼玉県立博物館要覧』1971年

58

これは出来上がった時のパンフレットに載っていたんですけど、「美しい大宮公園の環境にどのような博物館を建てたら良いのか。『たたずまい』と、その建築素材の選定にいささか心胆をくだいたつもりです。」ということを書いています。また、前川國男と議論を続けた浜口隆一さんが対談をしている記事が残っているんですけど、当時の前川の思いがよく表れていて、「素材を土に限った。当時はタイルっていうもので全部やった。それからガラスとか鉄というのに限った。それは現代の消費文明に対する僕の姿勢なんだ」と。そんなことを前川が語っているんですね。

これも別のインタビューだったと思うんですけど、自分の建築の中で「外部空間を重視する発想というのが、埼玉会館以来ひとつの傾向になっている」と。それが「埼玉県立博物館に引き継がれている」。これが面白いのは、「建物とそのまわりの空間を」写真家に、出来た時に撮ってくれて頼むんだけど、「写真家が随分苦心するという話を聞いた」と。この埼玉会館も多分、決め撮りのできない建物だと思うんですけど、埼玉県立博物館は余計、正面玄関の中庭のまわりを建物が囲んでいるので、この「一枚」で建築を全部捉えるってことができないわけですね。そのことを聞いた前川が「さもありませんと、ひそかにほくそえんでいる」。自分の建築の価値は、絶対写真には撮れないぞっていう思いを持ってたって語ってるんですね。

これは、当時の前川の思いですね。竣工のパンフレットの書き出しがこの言葉で始まっているところが、建物をつくる身としてはちょっと面白い言い方で、「『現代は悲しい時代である。新奇なものをつくることに憂身をやつすばかりで、よりよいものをつくらうとしない。』と嘆いた詩人がありました。」『使い捨ての時代』だし、消費は美德だって言われる。しかし、『物』を粗末にする現代はやがて『物』にひそむ『人の心』を傷つけずにはいない。「結果は、みられるとおりの環境破壊と人心の荒廃です。そんな中で残された道はただひとつ、破滅に向うこの文明の進路是正に努力することでありましょう。」これ、建物の竣工パンフレットの言葉とは思えないぐらい、非常に高い危機意識を持ったことがわかるんですね。

建築を構成する素材に対するこだわり

「素材を土に限った。つまり陶器タイルというので、全部やったわけです。ガラスと鉄に限ったということは現代の消費文明に対するほくそえんというかそういうことを反映していると取ってほしいと思う。あのタイルは十何年かかって開発したタイルでやっとあそこまでできたんですがね。この頃になってあれが全部トンネル窯になった。あまりにきれいに揃いすぎている。」

「対談：埼玉の未来と県立博物館／前川國男・浜口隆一」
『埼玉新聞』1971年11月30日

59

写真に写りにくい建築の存在価値を求めて

「外部空間を重視する発想は、埼玉会館以来の一つの傾向となりまして、この流れが埼玉県立博物館に引き継がれています。だからこの建物とそのまわりの空間をどのように画面の中に取り入れていったらよいかと写真家の方でも随分苦心したらしいという話を聞かれましたが、私はさもありませんと、ひそかにほくそえんでいた次第です。」

前川國男「スポンターニティが息づく生活空間を求めて」
『Commercial Photo Series』玄光社1978年

60

「未完の建築」という気持ちを抱いて

「『現代は悲しい時代である。新奇なものをつくることに憂身をやつすばかりで、よりよいものをつくらうとしない。』と嘆いた詩人がありました。現代は『使い捨ての時代』であるといひ、消費は美德であるとさえいわれます。(…)『物』を粗末にする現代はやがて『物』にひそむ『人の心』を傷つけずにはいません。結果はみられるとおりの環境破壊と人心の荒廃であります。(…)残された道はただひとつ、破滅に向うこの文明の進路是正に努力することでありましょう。」

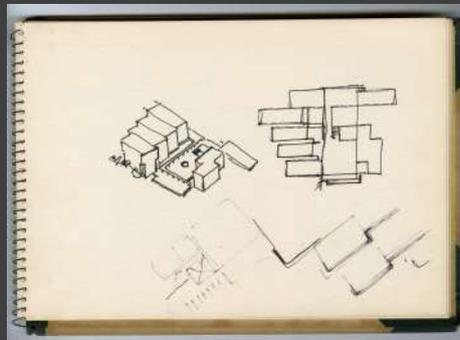
前川國男「設計者のことば」
『埼玉県立博物館要覧』1971年

61

前川國男 東京都美術館 1975年 撮影/村井修



62



64



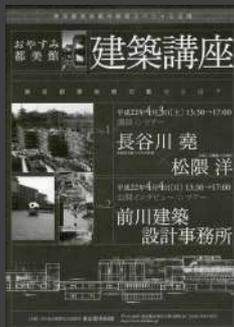
63

東京都美術館 広場 1975年 2010年撮影



65

おやすみ都美館 建築講座 2010年 企画/河野佑美



66

長谷川堯氏との対談 東京都美術館 講堂 2010年4月3日



67

東京都美術館へつながる埼玉会館の設計思想

そんな思いの中で続いて手がけたのが、この東京都美術館なんですね。これは、この美術館をつくるのに、これだけ大きな粘土の模型をつくるのかっていうサイズになってると思うんですけど、ここが上野の駅で、西洋美術館と東京文化会館。ここにある種の対話したものをつくろうとした。でもこちらに来た時に、もうひとつここに居場所をつくろうよっていう発想をしているわけですね。ですから、埼玉会館の実践を踏まえながら東京都美術館をつくったことが読み取れるわけです。こういうスケッチが残っています。

これが企画展示棟の、改築の前の地下広場の様子です。いろんな美術団体の展覧会が並行してできるように、同じ大きさの展示棟が4つ必要ということを生かして、単体の建物だけど街並みを構成できるような、そういう集合体にしようとした。

この改築の時に、この後お話ししてくださる河野佑美さんの企画で、これ、面白いタイトルだなと思ったんですけど。「おやすみ都美館建築講座」ということで、大変僕は私淑してました長谷川堯(*6)さんと対談をさせていただく機会をいただきました。

「素朴な材料で非凡な結果をつくる」熊本県立美術館にみる美術館の到達点

前川が最後に、美術館としてひとつの到達点になったと思われるのが、この熊本の美術館ですね。ちょうどこの埼玉会館の10年後になります。ですから、建築が何か形を表出するっていうよりは、置石のように建物を配置しながら、その内外にどういう空間をつくり出すことができるかということに集中していく。これ、つい最近撮った写真です。こういうスケッチも残ってます。

(*6)長谷川堯 (1937-2019) 日本を代表する建築史家であり建築評論家。島根県出身で、武蔵野美術大学の名誉教授として活躍し、数々の受賞歴を持つ彼は、日本の建築界に多大な影響を与えた。(https://pedia.3rd-in.co.jp/wiki/長谷川堯#google_vignette より)



68



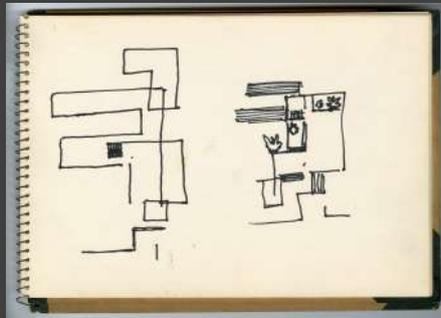
69



70



71



72

前川國男の言葉 1977年

「建築を作り上げる素材及び構法はもともと『平凡』なものが一番よいと考えます。そのような単純明快な素材及び構法によって『非凡な結果』を得ることこそが大切だと考えます。」

前川國男「建築とインテリアを担当して四半世紀」
『株式会社紀伊國屋書店創業五十年記念誌』1977年

73

この建物ができた頃、紀伊國屋の記念誌に寄せた文書の中に、晩年の境地が書かれてるんですけど。「建築を作り上げる素材、構法は『平凡』なものが一番いい」。つまり、人間が手に入れた材料で長く安定して使ってきたもの、別に何か新奇なものだったり見たことのない材料である必要はないんだ。まさに土に戻るような、そういう素朴な材料でいい。「そのことによって『非凡な結果』をつくることの方が大事なんだ」ってことを言ってるんですね。

弘前中央高校講堂の椅子を自ら補修する弘前市民

それで前川國男は、前川建築を「もの」として実在させるために、ものすごく力を尽くして、この日本の気候風土に合わせたものをつくってきました。そういう中で、それを受け取った側が、それをどういうふうにかして使っていくのか、共有していくのかってことが非常に問われているわけですけど、この20年間ぐらいの間で経験した中でやっぱり弘前の活動っていうのは、すごく僕は印象に残ってます。

最終的に前川國男は弘前に8つの建物を時代ごとにつくっていくわけですけど、この弘前中央高校は、実は前川國男が最初の青森県から依頼を受けて手がけた公共建築で、この埼玉会館の12年前、神奈川県立図書館・音楽堂と同じ年に竣工するんです。雪に閉ざされている高校の講堂なんですけど、弘前には文化会館がなかったので、この弘前中央高校の

弘前市民の活動から

“地域資源”としての近代建築へ

74

前川國男 弘前中央高校講堂 1954年
★前川國男の手がけた最初の公共建築



75



76



77



「弘前中央高校講堂イス補修プロジェクト」会場風景 2004年
古跡昭彦（1956～2005年／青森県立弘前工業高校建築科教諭）の指導



講堂が市民にとっては埼玉会館のような、いろいろなものを鑑賞する公共的な場所だったらいいですね。だから、それに思いがある人がたくさんいらっちゃって。

さすがに時間が経って建物が傷んできて改築の話もあったようなんですけど、特にこの座席が非常に古くて、この背板の塗装がはげて白いワイシャツにうつるようになってしまった。それで、これはなんとかしなきゃって「イス補修プロジェクト」っていうのを「前川

國男の建物を大切にする会」のメンバーが始めたんですね。これ、すごいと思うんですけど、地元の弘前工業高校の建築科の古跡先生という方がご指導して、この背板を一枚一枚全部外して、紙やすりで塗装を1回落として塗り直すっていう作業を始めたんです、2004年に。こうやって指導してくださってるんですけど、2年がかりで806席の補修を終えた。こういう付き合い方も市民がしてるんだなって、ちょっと教えられたんですね。そういうことの成果も含めて、20年前の前川國男生誕100年の展覧会を弘前に巡回させることもできたんですね。

弘前の市民活動は、つまり、出生届を出す市役所、病気にかかって通う病院、それから博物館で美術を鑑賞し市民会館でコンサートを聴き、最後は斎場で焼かれるという、自分たちが普段使っている建物がほとんど前川國男の建築だっということに気がついた人たちが、「前川國男の建築を大切にする会」っていうのをつくって地道の活動が続いていったということが大きかったですね。そのことを受けて2016年に弘前市が、全国の前川建築を所有している、埼玉県もそうですけど、行政に呼びかけて近代建築ツーリズムネットワークができた。

中庭は市民が生きがいに思いを馳せる場に

僕、実は去年の暮れに出した本を「未完の建築」っていうタイトルにして。これは前川の言葉なんですけど、多分ふたつ、意味があるかなと思ってらるんですね。ひとつは前川が育てようとしたような、この埼玉会館もそうだと思うんですけど、長くその場所に根付いて、時間に耐えていくような建築としての質をちゃんと備えたものになりたいということですね。もうひとつはその先に、それが生き生きと使われていってる状態にしてほしいということがあって、どうもそのふたつのことが、この「未完」という言葉に彼は込めたんじゃないかなという思いがあります。

実は埼玉県立博物館が出来た時の先ほどの浜口さんとの対談の中で、ちょっとそのことに触れてるんですね。「建物はできたけれども、さてそれをどう使うか。本当に人間の生き

「未完の建築」と前川國男が求めた世界

そして、現代の課題

「建物はできたけれども、さてそれをどう使うか。本当に人間の生きがいを感じさせるような使い方ができなければ意味がない。(…)博物館ではありますが、あの広い中庭、広いロビーをフルに生かす使い方というものを発見してほしいんです。夜でも市民を中庭で散歩させて、ベンチでも置いてポカンとしている時間を味あわせてあげてほしいし、要するに皆が自分の生きがいを大事にするという雰囲気が出てくればもっとよくなると思うんですが、今はとてもそこまでいいいっていないんです。」

「対談：埼玉の未来と県立博物館／前川國男・浜口隆一」
『埼玉新聞』1971年11月30日

86

がいを感じさせるような使い方ができなければ意味がない。博物館ではありますが、あの広い中庭、広いロビーをフルに生かす使い方というものを発見してほしいんです。夜でも市民を中庭で散歩させて、ベンチでも置いてポカンとしている時間を味あわせてあげてほしいし、要するに、皆が自分の生きがいを大事にするという雰囲気が出てくればもっとよくなると思うんですが、今はとてもそこまでいいいっていないんです。」実は埼玉県立博物館の中庭は、前川がこう書いてるとおり、自由にいられる場所としてつくったんですけど、管理上、塞いだところに門扉をつくってチケット売り場がそこにつくられちゃったんで、開いてない時間は中庭には入れなかったんですね。確か、前川が亡くなる直前ぐらいにようやく、券売所を建物の中に入れて中庭が解放されたんです。

市民が行き交うテラス

それから、これも思い出深いんですけど、東京文化会館の大ホールのホワイエの前にあるテラス、西洋美術館の前であって、今「Café HIBIKI」っていう外部から使えるカフェテリアになっているところなんですけど。

「ぼくが東京文化会館の使い方を見ていますとテラスがまだ使われていないんです。それは初代の管理者が外から無断で入って来る」これ、どうも東京藝大の学生が堀を乗り越えて入ってきちゃったらしいんですけど、「それで閉めちゃった。そういうのは前例ができると代々の管理者がそれを踏襲している。あのテラスが一度も使われていないのは残念で仕方がない。」これを71年に、埼玉県立博物館が出来たときに、今の中庭の話に続いて言ってるんですね。

実はこの10年後、東京文化会館に初めてミラノ・スカラ座が来てヴェルディのレクイエムを演奏したんですけど、前川さん、このヴェルディが大好きだったんで、ミラノ・スカラ座のすべての公演のS席のチケットを、奥さんと行く予定で買っていました。でも奥さん、体調が悪くなっちゃったんで、若い所員を代わりばんこに連れてってくれたんです

ね。NHKホールもあったんですけど、僕はやっぱり東京文化会館でどうしても聞きたかったんで、このチケット、今でも持ってるんですが、この会に行かせてもらってこの席（S席1階8列32番）、前川さんの隣で聞いてたんですね。この時に精養軒で、自分はハヤシライスが好物だからってハヤシライスをご馳走になって、大ホールのホワイエで窓越しにテラスを見て、書いてる通り「このテラスが全然使われてないんだよ。すごく残念なんだ」って話を僕に語ってくれました。結局、前川が生きていた間は、あそこは解放されなかったんですね。

「ぼくが手がけた東京の文化会館の使い方を見ていますとテラスがいまだに使われていないわけです。それは初代の管理者が外から無断で入って来るといって閉めちゃった。そういう一つの前例ができると代々の管理者がそれを踏襲するんですね。あのテラスが一度も使われていないのは残念で仕方がない。」

「対談：埼玉の未来と県立博物館／前川國男・浜口隆一」
『埼玉新聞』1971年11月30日

87



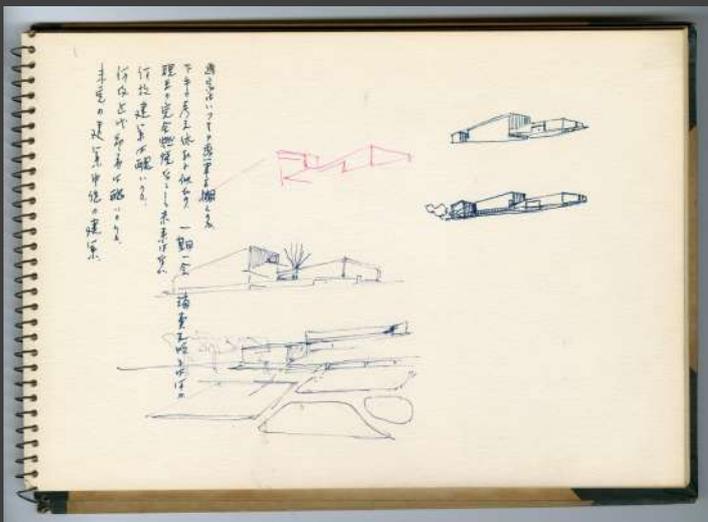
88

建築は使ってだんだん作品に成長していく

これも、前川さんの建築に対する、あるいは人間の生き方に対する非常に重要なことを言ってると思ってるんですけど。ちょうどあの（'70年の）万博の頃で、小松左京とか丹下健三が「未来学会」っていうのをつくるんですね。その時に前川さんがこういうことを言っていて。「ぼくは未来像というものは大きらいなんだ。現在というものの完全な燃焼なしに未来というものは生まれてこない。その環境に住んでいる人間が生の実感を持ってないならばその環境に美しさが出てくるはずがない。そういう意味での環境のデザイン、環境の設計、環境の創造が非常に大事じゃないか」。ずっとそういうことを温めているんですね。

それでこれ、実は埼玉県立博物館のスケッチブックに、「現在の完全燃焼なくして未来はない。なぜ建築が醜いのか。なぜ近代都市は醜いのか。未完の建築、中絶の建築」ってメモがしてあるんですね。

現在の完全燃焼なくして未来はない、
何故建築は醜いのか、何故近代都市は醜いのか、未完の建築、中絶の建築



90

建築家」自分たちと、それから「役所の人、施工者、エンジニアたちが毎年集まって、一年に一ぺんぐらいは健康診断をして、建物をかわいがっていくという気分が建築家になきゃいけないんだ。」それで、前川さんの作品集をつくる編集者の「宮内さんが『建築というのはできた時が作品ではなくて、使ってだんだん作品に成長していくんだ』ということを書いてたけど、あれは本当に至言だと思う。」言い得て妙だって前川が言ってるわけですね。

「生の実感」を持つことのできる環境の創造へ

「ぼくは**未来像**というものは**大きらい**なんです。（…）現在というものの完全な燃焼なしに未来というものは生まれてこないと思います。（…）その環境に住んでいる（…）人間が**生の実感**を持ってないならばその環境に**美しさ**が出てくるはずがないと思うんです。そういう意味での**環境のデザイン**、環境の設計、**環境の創造**というものが非常に大事なものであるのではないかという気がします。」

「対談：埼玉の未来と県立博物館／前川國男・浜口隆一」
『埼玉新聞』1971年11月30日

89

実は前川國男は、「もの」として、ある程度提案はできたんですけど、美術館もそうだし文化施設のほとんどが、実際にそこを運営したり使う人と密なコミュニケーションを踏まえた上で設計をするところまでたどり着かないで亡くなってるんですね。ですから、前川が思ったような建築っていうのは、片思いの感じで出来てるんだと思うんです。

これも大事な言葉を残して。 「自分が建物について話しておかしいけれど、たとえば埼玉県の埼玉会館・博物館・東京文化会館ああいう建物を建てた竣工の日を記念して、

建築を守り育てていくことの大切さ

「自分の建てた建物について話しておかしいが、たとえば**埼玉県**の（…）文化センター・博物館・東京文化会館ああいう建物を建てた竣工の日を記念して（…）建築家、役所関係の人、施工関係の、こういうエンジニアが毎年集まっている。（…）一年に一ぺんぐらいは**健康診断**して建物をかわいがっていくという気分が建築家になればダメという気がする。（…）宮内が（…）『**建築というのはできた時が作品ではなくて、使ってだんだん作品に成長していくんだ**』という意味のことを何かに書いていたが、あれはほんとうに至言だと思う。」

前川國男「歴史的体験者からみた設計者のための制度」
『建築雑誌』1973年10月号

91

ル・コルビュジエとサン＝テグジュペリと前川國男の縁

これも確証があるわけじゃないんですけど、サン＝テグジュペリとル・コルビュジエは交友がありました。前川國男がちょうど留学していた1929年に、コルビュジエはアルゼンチンに講演旅行に行くんですが、その飛行機を操縦してたのはサン＝テグジュペリです。

前川國男もサン＝テグジュペリの本をたくさん読んでたようで、擬人的な言い方なんですけど、建物と人間の関係みたいなことをちょっと思い浮かべて、この文章を読んでおきたいんです。「そりゃ、ぼくのバラの花も、そばを通っていく人が見たら、あんたたちとおんなじ花だと思えるかもしれない。だけど、あの一輪の花が、ぼくにはあんたたちみんなよりも大切なんだ。不平も聞いてやったし、じまん話も聞いてやったし、時にはどうしたのだろうときき耳をたててやった花なんだからね。ぼくのものになった花なんだからね。」この後、有名な言葉ですね。「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは目に見えないんだよ。」

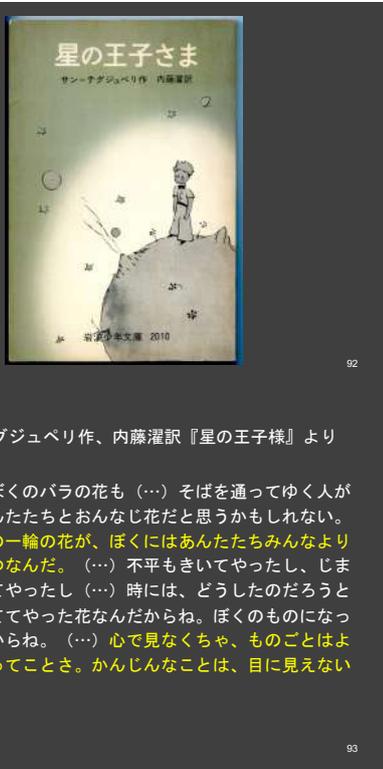
多分、建築と人間の関係もこれに近くて、建物に愛着を持っていく、そういうことが建築を育てるし、街を育てることになるんだと思うんですね。ですから今、実は僕、少し違和感を持っているのは、ツーリズム、建築祭りとかで、あつ

ちこっちの建築がオープンハウスして、たくさんの人が見に来てるのは、それは建築の裾野を広げてるんですけど、そこで止まってしまったら、消費しておしまいになっちゃう可能性があつて。

僕の今日お話ししたいことなんですけど、次の時代に渡せるような、公共性を育むような共有地を創造するってことを意識的にやらなきゃいけない時期に来ていると思います。

「建築家とは、建築とは」を常に問いかけながら

これも、たまたま手にした政治学者の人が書いた『<私たち>の場所－消費社会から市民社会を取り戻す』って本で、この中に出てくるこの言葉にいろいろ考えさせられるんですけど。「市民社会には<私たち>の場所があるべきである。それは真に私たちのための場所であり、私たちが共有しているもののためであり、共有の中で私たちが育っていく場所である。その場所は民主的でなければならない。」これ本当に、神宮外苑とかあちこちの開発で、ものすごく問われている話だと思うんですけど。私たちは本当に、前川が実は見たくて見れなかった市民社会を育てて、その市民社会によって自分たちの共有地を育てて次の世代に渡すような努力をしてるんだろうか？って問われてる気がしてるんですね。



92

93

サン＝テグジュペリ作、内藤濯訳『星の王子様』より

「そりゃ、ぼくのバラの花も（…）そばを通ってゆく人が見たら、あんたたちとおんなじ花だと思えるかもしれない。だけど、あの一輪の花が、ぼくにはあんたたちみんなよりも、たいせつなんだ。（…）不平も聞いてやったし、じまん話もきいてやったし（…）時には、どうしたのだろうときき耳をたててやった花なんだからね。ぼくのものになった花なんだからね。（…）心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ。」

「モノ」から「コト」へ

よりどころとなる身近な場所の再構築を

鑑賞の対象から「公共性」を育む「共有地」の創造へ

94



「市民社会には〈私たち〉の場所があるべきである。それは、真に**私たちのための場所**であり、私たちが共有しているもののためであり、**共有の中で私たちが育っていく場所**である。その場所は民主的でなければならない。」

ベンジャミン・R・バーバー著、山口晃訳
『〈私たち〉の場所—消費社会から市民社会をとりもどす』
慶應義塾大学出版会 2007年

「人間というものがたよりなく、たよりない人生であると感じた時に、建築家というのは、やはりその時点において、自分の実在と言いますか、実在感を求めて、コツコツと苦しい設計作業を続けるんだと思います。**建築家とは何であるか、建築とは何だろうか**ということを常に自分に問いかけながら仕事をするのが建築家であり、作品はその答えにあたるものだと思います。」

「建築を志す者へ」名古屋工業大学講演 1978年10月19日

95

96

97

これ、晩年の前川の言葉ですけど、こういう思いを持っていた。「人間というものがたよりなく、たよりない人生であると感じた時に、建築家というのは、やはりその時点において、自分の実在と言いますか、実在感を求めて、コツコツと苦しい設計作業を続けるんだと思います。建築家とは何であるか、建築とは何だろうかということを常に自分に問いかけながら仕事をするのが建築家であり、作品はその答えにあたるものだと思います。」
こういうふうに学生に呼びかけた言葉が残っていて、僕はこの前の年に同じような言葉を京都大学で聞いてます。

それで時間が経っちゃったんで、こんな写真もあるんですけど、この後お話ししてくださる橋本さんに、僕は見習いでくっついて、国立音楽大学の幼稚園の現場に常駐しました。橋本さんも若かったし、僕はもっと若かったんですけど、こういう出会い方をしています。

国立音楽大学付属幼稚園 竣工式 1983年10月8日
前川國男(78歳)・橋本功(38歳)・松隈洋(25歳)



98

次の世代に渡せる建築からまちづくりへ

それで、これが前川が亡くなる前の年に残した言葉なんですけど。「現代の建築界と設計姿勢において欠けているものはどんなことでしょうか」って聞かれて、「いろんなものが欠けているけど、一番欠けているのは建築というものに対する愛情じゃないか」「建築

というものをあまり深く考えていないことが原因じゃないか」「とに角今、建築界全体が考えねばならないのは町並みですね。」「建築の単体一つ一つの問題じゃなくて、町並みという建築の郡としての佇まいがもっと人々の関心を引かないといけない」

多分、今日話したいのはこのことで、まさにこの埼玉会館、埼玉県立博物館、いろんなところで前川國男が差し出したものを、いかに自分たちがそれを使い倒して、次の世代にいい形で渡せるか、なおかつ、そういうところ学んだことを、身近なまちづくりとかそういうところに対する知恵として使っていく時代なんだと思うんですね。

今年、前川が生誕120年で、これは亡くなる2年前ですね。5月14日が誕生日だったんですけど、事務所にいたら、前川國男がこの赤い帽子を持って喜んで上に上がってきたので、「先生、どうしたんですか？」って言ったら、「いや、誕生日にこの赤い帽子もらっ

前川國男 最晩年の言葉 1985年
「現代の建築界とか設計姿勢において欠けているものはどんなことでしょうか」と問われて

「いろんなものが欠けているけど、一番欠けているのは、**建築というものに対する愛情**じゃないかと思うんですよ。(…) 建築というものをあまり深く考えていないことが原因じゃないかと思いますが、とに角今、建築界全体が考えねばならないのは、**町並み**ですね。これは大事なことじゃないかと思っています。**建築の単体一つ一つの問題**じゃなく、**町並みという建築の郡としての佇まい**がもっと人々の関心を引かないといかんと**思っているんです。**」

「建築家の世界」前川國男
『HIROBA』通巻254号、1985年6月号

99

たんだよ」「じゃあ先生、それちょっとかぶって。僕が撮ってあげるから」って所長室で撮った写真です。そういう関係だったということも含めて、前川の生誕120年をこの場でご紹介して、僕の講演は終わりたいと思います。ありがとうございました。

1984年5月24日の前川國男(79歳) 撮影／松隈洋(26歳)



100

*投影資料の特記なき写真は松隈氏自身の撮影によるものです

第2部「市民と、めでる、たのしむ建築」

河野 佑美（こうの ゆみ）

東京都美術館企画調整課アート・コミュニケーション係学芸員（公益財団法人東京都歴史文化財団）

2006年武蔵野美術大学大学院造形学コース美学美術史修了。専門は造形学。2010-11年の東京都美術館大規模改修工事をきっかけに建築のプログラム（「おやすみ都美館建築講座」）を企画・運営。その後、市民とのプロジェクト「とびらプロジェクト」（東京都美術館×東京藝術大学）や建築ツアーの企画運営を担当。現在は、6歳から18歳のこどもとその保護者や支援者のミュージアム・デビューを応援する上野公園の9つの文化施設の連携事業「Museum Start あいうえの」の企画運営を担当。文化資源と「みる、かんがえる、はなす、きく」をベースにしたプログラムの企画運営を行っている。

2年間の休館を前に、都美という建物に親しんでもらう

河野：皆様こんにちは。東京都美術館の河野と申します。今日は松隈さんと橋本所長が前川國男のことは皆さんにしっかりお伝えくださるので、私は美術館で市民の皆さんとどれだけ楽しんでいるか、愛でてるかということをお伝えしたいと思います。

市民と、めでる、たのしむ建築

東京都美術館 河野佑美

2025年9月20日



まず最初にご覧いただくのは、私が働いている東京都美術館が上野公園の中でどんな位置関係にあるかという地図です。小学校1年生から高校3年生までを対象としたプログラムの際に使っている地図ですが、センターから少し上に位置するのが、東京都美術館です。上野公園には、同じ前川國男が設計した東京文化会館、前川の師匠であるコルビュジエが設計した西洋美術館をはじめとした多くの文化施設が集まっています。その中で、東京都美術館は1926年に開館いたしました。前川國男が設計した現在の

当館の建物が竣工したのが、1975年の9月になります。

私は、この東京都美術館に2006年に着任しました。美術館が80周年の年でした。造形学という形に関わる学問で修士号を修めてから美術館にまいりました。その当時の私は、公募の展覧会を開催する市民の方々に展示スペースを貸す業務をしておりました。私が勤め始めてしばらくした後、東京都美術館の改修工事が決まりました。「2年間の休館になります」と上司に言われた時に、私は、なんて寂しいんでしょうって思ったんです。というのも、私の記憶の中で美術館に行った最古の記憶が、東京都美術館だったんです、母に連れられて。

改修工事では、外側の見た目は変えないと説明を受けましたが、それでも何か変わる場所が当然ながら出てくると思いました。加えて、2年間お休みしている間に、六本木の国

立新美術館が開館する。これはもう、お客さんを六本木に全部吸い取られてしまうのではないかと。2年後に都美がリニューアルオープンした時には上野に、都美にお客さんが戻って来なかったらどうしようって、半ば本気で思っていたんです。ですので、何か、建物そのものを見てもらって、また改修工事が終わって戻ってきたときに「都美、また開いたね」って皆さんが戻ってきてくれるようなそんな

プログラムをやりたいなあと思って上司に掛け合っ
て、開館日最後の2日間に建築のプログラムを実施
したのです。今、お見せしている写真は、そのプロ
グラム中の一コマです。椅子の座面を愛おしそうに
撫でるおじいちゃま。それから、舞台上に並べたタ
イルをデジカメで撮る皆さん。こういう風景は、私
にとっては願ったり叶ったりの状態だったんですけ
れども、美術館であんまり見ないですよ。



会話が弾む大盛況の建築ツアー

このプログラムでは建築ツアーも実施しました。まだその当時、世の美術館では建築を一緒に見るっていうプログラムはあまり多くなくて、これが都美でも初めての「建築を人と一緒に見るプログラム」だったのです。この私が考えたプログラムで参加者を募集する時、他の職員からは「建築で人が呼べるのかい?」と、かなり懐疑的な言葉をかけられました。私はその当時、一番下っ端の年代の職員だったので、本当に来なかったらどうしよう、クビかなって思いながら。その当時まだ参加申し込みは往復はがきによる方法だったのですが、「エントリーのはがきが来ましたよ、河野さん」って管理係の窓口さんに言われるのを心震わせて待つ、そんな日々だったんです。が、募集の締め切りが近くなったら、すごい勢いではがきが届き始めたんです。

さらにそのプログラムでは、200名定員の講演会に加えて、松隈さんと大学院時代の建築史の恩師、前川建築設計事務所の所長、副所長、それからOBの2人を呼んでの、いわゆるプロフェッショナルたちによるガイドツアーをこじんまりとしようと思ってたんです。そうしたら、ガイドツアーに参加したいって書いてくださった方がすごい数いてくださって、定員30人だったのが10倍ぐらいになっちゃったんです。講演会を聞きたい人は、ほとんどツアーにも参加したいと思ってきていたんです。「あ、まずい」と思って、真っ先に、その当時の館長、真室佳武館長に相談したんです。「館長、どうしましょう。ツアーに参加したい人がいっぱいいます。館長、ツアーをやってくださいます?」って、ぼそっと言ったら、「いいよ。他の職員にも声かけなさい」って言ってくださって。私は、館長のお墨付きをもらえたので、もうウキウキで他の職員にもお願いしますって言って。この真ん中に写ってい





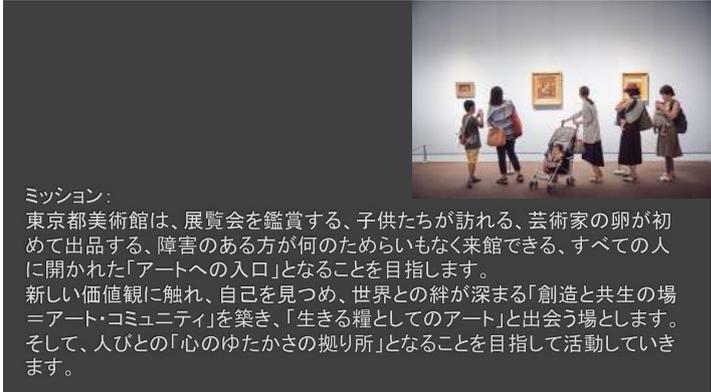
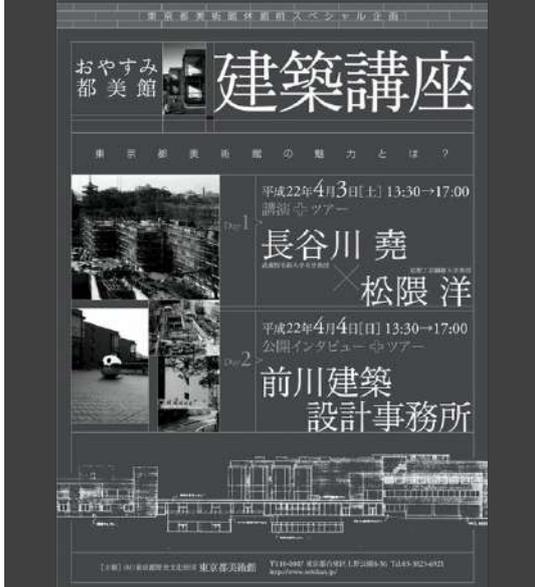
るのは、当時、学芸員をしていた職員で、今は学芸担当課長ですが、彼にもお願いして、「もう、しょうがないなあ」と言われながらも、10人近くの職員が参加してくれるようになって、ツアーに参加を希望する全員に対してツアーができる体制が整いました。

このツアーで、建物を見ることが、「これがどういう工法で、何年経って、誰がどういう設計で」ということがなくても十分楽しめるっていうことがわかったんです。それは、ツアーを率いた職員も実感したことと思います。自分たちが普段働いているその場所、館長であれば館長室で「ここに誰々

が座りましてね」とか、そのいつもの風景を、いつもそこにはいない人と一緒に見る。どこが自分が気に入っている場所で「ここ見どころなんです。写真映えポイントなんです」って。それで一緒に見てる人がさらに「あ、ここ、なんか私も好きです」っていう、そんな会話のやり取りで建築を楽しむことができいく風景が、そこにあったんです。ここに写っているのは高橋義明さん、東京都美術館の現場に入っておられた前川建築設計事務所の元所員さん。それから今日この後、お話しいただきます所長もツアーをしてくれました。みんなでわいわいと館内をぐるぐる回ったわけです。

この時は、講演会もツアーの前に行いました。先ほど松隈さんのスライドにも出てきましたけど、私の大好きな建築史の先生、長谷川堯さんと松隈さんに、1日目にご登壇いただきました。2日目は、前川事務所の皆さんと「前川について、東京都美術館について話す」という内容でした。プログラム告知のチラシも、頑張って作りました。その当時、美術館のパソコンにはいわゆるデザインソフトが全く入ってなくて、私はこれをエクセルで作りました。それを印刷屋さんに印刷ができるデータに起こしてもらって、なんとか配れる形に。お金もなかったのでカラーにできなくて、2色刷りでグレーと白で作りました。

東京都美術館は2010年の4月5日から2年間の改修工事休館に入りました。この休館告知ポスターも、2色コピーを使って私が作ったものがなぜか採用されるという、本当に手作り感あふれる美術館っていうのが東京都美術館です。



ミッション:
東京都美術館は、展覧会を鑑賞する、子供たちが訪れる、芸術家の卵が初めて出品する、障害のある方が何のためらいもなく来館できる、すべての人に開かれた「アートへの入口」となることを目指します。
新しい価値観に触れ、自己を見つめ、世界との絆が深まる「創造と共生の場＝アート・コミュニティ」を築き、「生きる糧としてのアート」と出会う場とします。そして、人びとの「心のゆたかさの拠り所」となることを目指して活動していきます。

何かに出会って何かを感じる美術館を目指して 「とびらプロジェクト」誕生

さて、この2年間の休館中に、東京都美術館は次の時代に向けてどういうふうに美術館を運営していくかを、学芸員全員で話しながら準備をしました。その中で一番大事に考えたことが、「創造と共生の場、アート・コミュニティを築き、『生きる糧としてのアートと出会う場』とします」というミッションです。「美術館を、ただ見に来る場所だけではなくて、そこで何か得てもらう、何かに出会ってもらう、何かを感じてもらってということをこれからの



4つの役割

1. 世界と日本の名品に出会える美術館
2. 伝統を重視し、新しい息吹との融合を促す美術館
3. 人々の交流の場となり、新しい価値観を生み出す美術館
4. 芸術活動を活性化させ、鑑賞の体験を深める美術館

4つの柱

- ・「展覧会事業」 特別展や企画展など、見る喜び、知る楽しさを提供する
- ・「公募展事業」 公募団体やグループと連携し、つくる喜びを共有する
- ・「アート・コミュニケーション事業」アート・コミュニティ形成による新たな可能性を探求する
- ・「アメニティ事業」アートラウンジや美術情報室、ミュージアムショップ、レストラン等、訪れる楽しさを充実させる

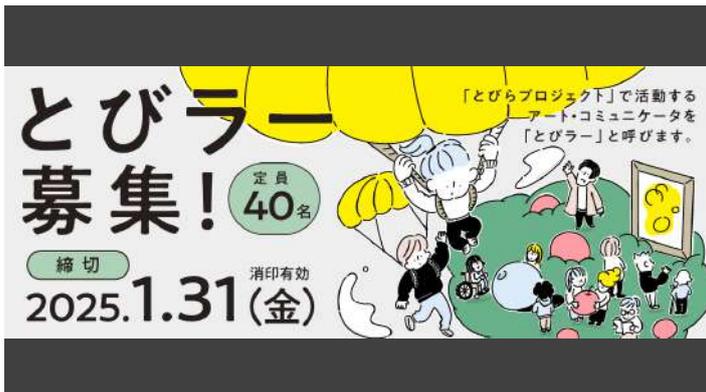


ミッションとして再出発しよう。心のゆたかさの『よりどころ』となるように活動を続けていこう」ということを職員全員で決めて再出発しました。

美術館の4つの役割を決め、4つの事業の柱を立ててリニューアルオープン、リ・スタートをしたのです。私はアート・コミュニケーション事業というところに籍を置いて、市民とどのように美術館を盛り上げていくか、どのように活動していくかということを考えていく、そんな仕事を始めました。上野公園をフィールドとして東京都美術館、それから隣に立地する東京藝術大学と手を組んだ事業も始めました。私がやりたくてたまらなかった建築ツアーも館の事業としてエントリーされました。

ツアーを毎回職員と実施するのは難しいことですが、お隣にある東京藝術大学とのプロジェクトの中で、市民と一緒に美術館をプレイ・グラウンドとして活動していくというプロジェクトが開始されたので、ここに参画する「とびラー」、アート・コミュニケータと一緒に建築ツアー、建築を見る会を続けていくことができるようになったわけです。

とびラーと一緒に建築ツアー、建築を見る会を続けていくことができるようになったわけです。





バラエティ豊かな講座で基礎体力をつける「とびラー」たち

とびラーは建築の専門家でもないですし、美術館のプロフェッショナルというわけでは
ないですが、皆さん、いろんな興味を持って美術館という場をベースに、楽しんで一緒に
活動してくれている心強い仲間たちです。18歳以上の大人の方が対象で、1月末を応募締
め切りとして毎年40人募集しています。任期は3年間です。3年が終わると皆さん、それ
ぞれの地元に帰ってまた活動を続けていく。どんどん、アートを介したコミュニティが広
がっていく。そんなことが続いています。

コミュニケーターたちはいろんな講座を受け、いろんな実践をしながら美術館とその美術
館を舞台とした活動の基礎体力をつけていきます。私が関わっていたのは建築の実践講座
でしたが、座学あり、実践あり、外部講師の講座あり、バラエティ豊かにいろんなことを
知って体感していくことができるように講座を組み立てていました。もちろん建築の講座
は、見るっていうのが何よりも大事ですから、遠足にもたくさん行きました。小金井市に
ある前川國男の移築された自邸だったり、午前中に新橋、銀座の八丁目の博品館に集合し
て四丁目まで歩き、四丁目で一旦お昼休憩にして午後3時過ぎに京橋まで到着するって
いう弾丸銀座建築鑑賞ツアーをやってみたり、国際文化会館に行ってみたり、赤坂迎賓館に
行ってみたり。いろんなところにみんなで行って見て楽しむことをずっと続けました。

とびラーのアイデア満載の 建築ツアー

とびラーたちと始めた建築の
ツアーは2012年の9月が最初で
す。10名くらいのとびラーとス
タートしました。まだ美術館が
新品、リニューアルしたてで、すごく壁が綺
麗だなんて思いながら見てました。ツアーで
は、埼玉からいらっしゃる方が居れば、埼玉





は、金曜日の夜間開室日、それも特別展という展覧会が開いている時しか実施できないので、「見れないと申し訳ないから」と言って、マップを作ったり。

さらに美術館のミュージアムショップとコラボレーションして、トートバックもデザインしちゃいました。これ、タイル・デザインですね。残念ながら今はもう限定数が全部売り切れちゃったので売ってないのですが。

さらには、子供たちも一緒に楽しめないかと、子供対象のハロウィン・ツアーも企画しました。建物を見ることに集中できるようにマスクというアイテムを使って、「美術館の一番眺めのいい場所を探そう」と言って、館内を探索する。とびラーたちはハロウィンの魔女の格好に仮装しているつもりなんですけど、これでプログラムを盛り上げているのです。これは、この窓からスカイツリーが見えるので、みんなでスカイツリーの形のポーズをしている。身体から全部で建物を楽しんでいくって

いうひとつの事例です。

さらに最近、スタンプラリーで建築鑑賞を楽しむというプログラムも起こりました。とびラーさんたちはめっちゃめっちゃ器用なので、消しゴムに建物のパーツを彫って、その消しゴムはんこでスタンプラリーをするという、見て押して楽しむ、そんなプログラムも考えたりしています。

大人も子どもも障がい者もみんな一緒に楽しんでいる

見て触って楽しむのは誰でもできますから、どんな特性があっても全然問題ありません。美術館の目指す「誰にとってもアートへの入り口になります」「楽しめる場所になります」ということを、実践でガシガシと推し進めてくれている。ツアーの時も、スタッフがどうこう言うわけでもなく、当日のツアーの予定ルートを共有し





て、ツアー同士がかぶらないように調整をし、さらに参加者に配る印刷物とかも自分たちで用意して、皆さん、楽しくツアーをやっています。

これは新旧の都美術館の模型を使って、間違い探しなどを行っている場面です。子供たちもすごい楽しそうにしています。年齢も制限をつけていないので、小学生が参加する時もあるし、みんなで楽しんでいく、そんなタイプのツアーです。

この写真でも、参加している皆さんは初対面なんですけど、話しているうちに本当に楽しくなっている。「穴が開いてるんです」って言うと、人間、なぜか覗き込みたくなってタイルを覗き込んだり。別に、奥に何かあるわけじゃないんですよ。でも、なんか覗き込みたくなるし、それをみんなでできるって楽しいですね。

最近は、聾や難聴のとびラーもいますから、手話での建築ツアーも試しています。都の全体の施策としても、多言語の中には手話も入っています。館のアクセシビリティを整備していく中で、建築の案内動画を手話で作りました。ぜひ、都美のウェブサイトをご覧ください。



建物が発するメッセージを受け止められる次世代に

大人と楽しむということはだいぶできてきたので、この先、次の世代を私たちは育てていかなきゃいけない、受け継いでいかなければいけない。そこで、6歳から18歳の子どもたち対象のプログラムの中でも、建築を見ることを取り入れ始めています。解説をするのではなく、自分の目で見て、そこに何が起きているのか、何があるのか、それをどういうふうに自分で捉えられるのかっていうのを言葉にしていくということに、一生懸命取り組んでいます。

これらは、私が大好きな写真たちです。こんなふうに自分が発見したことを言葉にして誰かと共有していくっていう経験ができれば、自分の意見が相手に受け入れられるということもわかってきます。自分が普段生活している街の中にたくさんある建築が、「ただそこにあるわけではなくて、何かメッセージを発しているものである。それを受け取れる





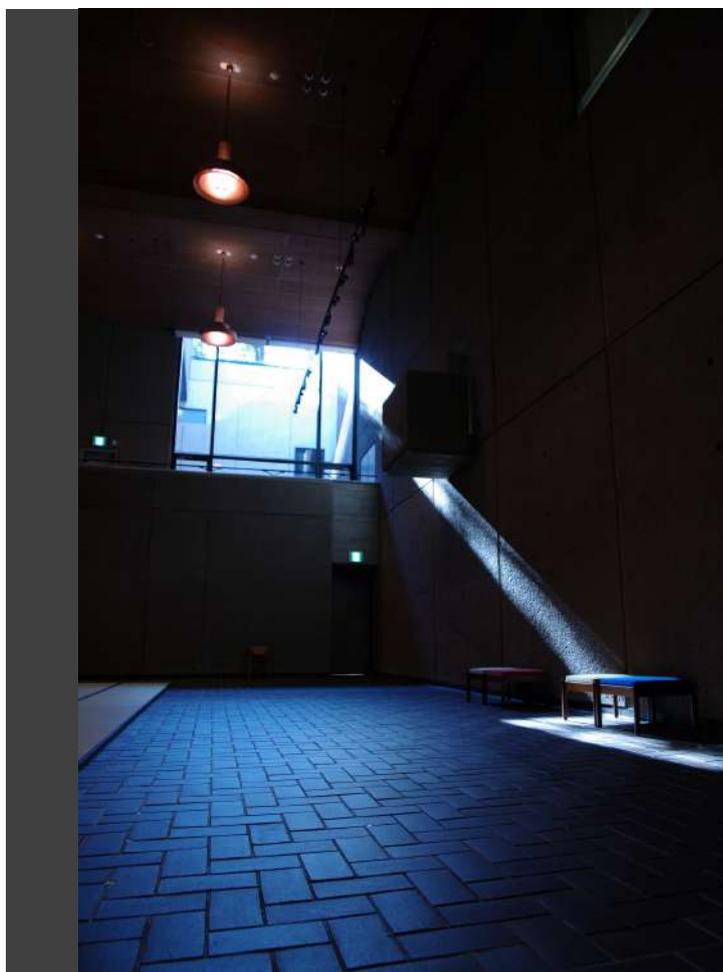
と、もっと楽しく街歩きができる」っていうことが、小さな歳の子供たちにも伝わっていけばいいなと思って活動を続けています。

これは、東京文化会館で発見ツアーをした時です。反響板に対して何かを発見した、とか、座席の椅子がカラフルだったとか、遠くから見るとまちまちに見えるから空いてる席が目立たないよとか、いろんな発見をするわけです。今年の夏も久しぶりに文化会館とご一緒に、大ホールでプログラムを行いました。本当にいい風景です。



こんなふうに専門家じゃなくても、とにかく建物を愛でまくって、それを誰かに伝えていくことで、前川がずっと建物に込めていた「市民がそこに介在していく。つくった後、誰かが使っていくことで建物が成長していく。」ということ、東京都美術館でも少しでもやっていけたらと思っています。私からは、日々、建物を愛でているという小さな活動のお話でした。

ご清聴ありがとうございました。



ご清聴を感謝いたします。

第2部 「前川建築を継承すること～東京都美術館の改修事例を通して～」

橋本 功 (はしもと いさお)

株式会社 前川建築設計事務所 代表取締役所長

1945年神奈川県生まれ、1970年日本大学理工学部建築学科卒業後(株)前川國男建築設計事務所入所、1994年(株)前川建築設計事務所取締役、2000年代表取締役に就任、現在に至る。担当した主な作品は、福岡市美術館(1979)、埼玉県立自然史博物館(1981)(現・埼玉県立自然の博物館)、国立音楽大学講堂(1983)・国立音楽大学付属幼稚園(1984)・付属中・高等学校増築(1995)・付属小学校(2008)千葉県東総文化会館(1991)、埼玉県児玉町総合文化会館(1995)、など。この間、弘前市から熊本県までの、使われている全国の前川建築の保全改修や前川建築に関する様々な活動に精力的に係わり続けている。

1926年開館の岡田信一郎設計の東京府美術館

橋本：前川建築設計事務所の橋本です。本日は前川建築を継承するというお話しいたしますが、河野さんがせっかくいらしておりますので、東京都美術館の、2012年に行われた改修事例をもとに、どういうふうにして前川建築を継承しているのかという具体的な内容をお話ししたいと思います。

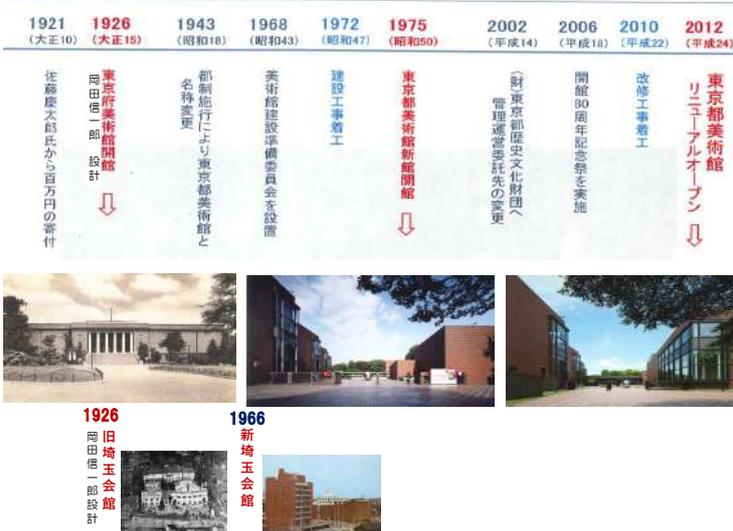
ご承知のように東京都美術館の前身、東京府美術館が1926年、大正15年に開館いたしました。これがたまたまというわけではないのかもしれませんが、この埼玉会館の前の旧埼玉会館、これも実は1926年、同じ設計者、岡田信一郎さんによる設計なんです。前川は、旧埼玉会館と旧東京府美術館を、同じ設計者から引き継いで改築に携わったということになります。

前川建築を継承すること ～東京都美術館の改修事例をととして～



この旧東京府美術館は、半世紀にわたり我が国を代表する文展とか帝展、院展、二科展など、いわゆる官民の公募団体の展覧会場として親しまれてきました。その後、公募団体がどんどん数が増えまして、会場が当然狭くなる。あるいは建物がだいぶ劣化してくる。こういう状態の中で新しく建設されたのが、1975年竣工の前川による新東京都美術館でした。埼玉会館は1966年に改築されてますが、東京府美術館は1975年まで使われてきたことになります。

東京都美術館史

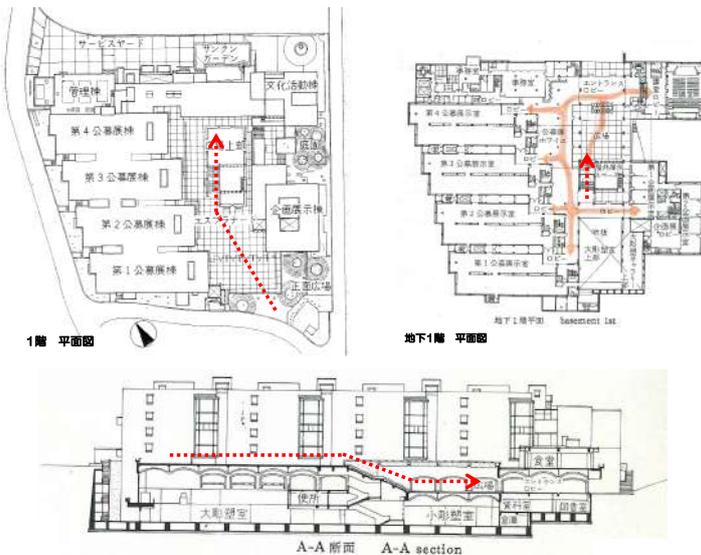
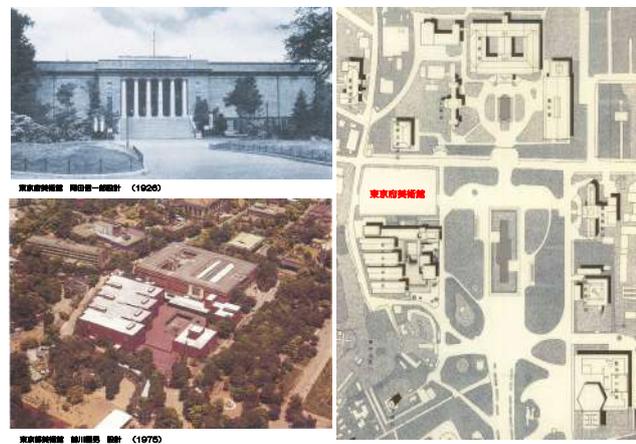


新東京都美術館に求められた機能

旧東京府美術館はもともと公募団体だけの展示会場でしたが、新東京都美術館は新たに企画展示棟、教育普及のための文化棟が加わりました。特に公募棟に関しては、4つの大きな公募団体が同時に開催できるという条件、展示室の展示壁面と内部の環境をすべて同じにするという条件がつけました。

さらに全体として、建築面積は旧東京府美術館を超えてはならない、床面積が旧東京府美術館の1.8倍という条件がつけました。また、公園法の関係もありまして、高さは15m以下ということがありましたので、新しい東京都美術館はほとんど地下に、延べ床面積の60%を地下に埋めるということになっております。この60%を地下に埋めるという発想は、実は埼玉会館も延べ床面積の60%を地下に埋めて、屋上にエスプラナードという広場をつくったということでもありますので、非常に環境、状況、生まれが似てるなという感じがいたします。

これが旧東京府美術館、これが1975年にできた新東京美術館。まだそのできた当時には旧東京府美術館がありました。



新しい美術館は、1階においては動物園側に公募棟が、公園側に企画展示棟、正面に管理及び文化棟が配置されました。地下1階に降りていきまして、メインロビーがあり、ロビーから各棟へ入っていくという環境になっております。

これが断面図です。1階のレベルから地下へ下がって、ここがメインロビーに。このレベルから各棟へ上がっていくということになります。この4棟が、全く同じ壁面積、床面積および環境につくられております。また、エスプラナードと称される1階のアプローチが公園全体とつながって、公園と一体になった広場になっています。先ほど松隈君の話にも

ありました、都市との関係をつくるという計画は行われております。

新東京都美術館が出来て、竣工から31年経った時に、公募団体がさらに増え、建築や設備面のハードもだいぶ老朽化してきた。そして建築基準法も変わってきた。また高齢化社会に向けてバリアフリー、あるいは色々な省エネの問題、展示空間の照明器具とか空調環境の問題もシビアになってきまして、さらにはアメニティの向上。こういうことが課題になってくる中で、先ほど河野さんの話もありましたけども、2007年には六本木に国立新美術館ができ、公募団体の国立新美術館とこの東京都美術館の棲み分けという問題も浮上してきました。

前川建築を後世に継承するという大規模改修計画

そこで2006年、平成18年に、東京都は「都立文化施設のあり方検討委員会」というのを開きまして、都が抱える文化施設についての老朽化に対する検討会を進めました。その中で東京都美術館の改修においては、「優れた前川建築のひとつである美術館の建物を保存して、都民に親しまれている佇まいと共に後世に継承していくべき」という指針が出まして、前川建築を生かす形で躯体を残し、施設全体を全面更新する大規模改修を行うという提言が出されたわけでありまして、この提言をもとに、改修に

都立文化施設のあり方検討委員会報告書(概要)

<p>都立文化施設のあり方検討委員会報告書</p> <p>「東京都立文化施設」の存続を前提として、設備等の老朽化への対応が必要となる東京都美術館、東京都劇場、東京都音楽ホールを中心に、施設が老朽化と改修等に関する今後の方針について検討</p>	
<p>東京都美術館の課題と今後の方向性</p> <p>現状と課題 ・展示スペース、設備の老朽化等による展示・リアフリー等の低下 ・展示スペースの確保 ・展示スペースの確保 ・展示スペースの確保</p>	<p>東京都劇場の課題と今後の方向性</p> <p>現状と課題 ・展示スペースの確保 ・展示スペースの確保 ・展示スペースの確保</p>
<p>新しい東京都美術館のあり方</p> <p>展示スペースの確保 ・展示スペースの確保 ・展示スペースの確保</p>	<p>東京都音楽ホールの課題と今後の方向性</p> <p>現状と課題 ・展示スペースの確保 ・展示スペースの確保 ・展示スペースの確保</p>

計画の基本方針

- **躯体を残した大規模改修**
現在の躯体を極力活かし、都民に親しまれた美術館の佇まいを後世に継承する。
- **新たな文化の発信拠点として再整備**
東京の「顔」となる、国内外への新たな文化の発信拠点として、多様な芸術文化に親しむ機会や文化創造環境の創出を図る。
- **美術館としてのアメニティや魅力の向上**
ユニバーサルデザインへの取り組みや付帯設備の充実を図り、来館者に芸術文化とかわる楽しみや楽しさをもたらす空間づくりを目指す。
- **設備の全面更新、環境負荷の低減**
設備（電気・空調換気・給排水衛生・昇降）の全面更新を実施するとともに、更新にあたり省エネ設備などの導入を可能な限り図る。

における「東京都美術館大規模改修工事基本計画」が策定されまして、「躯体を残した大規模改修にする」「新たな文化の発展、拠点としての再整備を行う」「美術館としてのアメニティの向上を図る」「設備の全面更新、環境負荷の低減」という4つの基本方針が示されました。

この基本方針をもとに、2011年3月より、外壁と躯体を残して内装と設備を、全部撤去して新しくする、いわゆるスケルトン改修が行われました。

現代にふさわしい機能が満たされた内部空間

これは、改修前と改修後です。企画棟が大きく変わりました。それから、この1階レベルにあったレストランは、今度は2階にもって行ったということと、その他いくつかのレストランができました。さらに、この一部のコーナーにしかなかったミュージアム・ショップは、地下1階のレベルでロビーを拡張して充実を図った。全体として、展示空間の環境、主に照明と空調関係の充実化とリアフリーの環境整備が行われました。

企画棟の大型化は、かなり大掛かりな改修となりました。企画棟は昔はコアがあって、その周りに天井高3m程度の小規模な展示室がぐるっと回った程度の内容でしたが、改



修では、この断面の地下のレベルから上を全部壊して、新たに天井高が4.5mの展示空間を、三層に重ねてつくった。内部空間も昔はこのように小さかったんですけど、大きな一間になった。さらに企画棟の専用のロビーにエスカレーターを設けて、行き来ができるようになりました。投影画面はちょっと抽象的に描いてるんですけども、これだけの大規模改修になった。



新設された企画展示室ロビー

打ち込みタイル再現の苦心・工夫

この解体に当たり、外壁の打ち込みタイルも工事関係者と経験と課題を探るために、モックアップをつくって打ち込みタイルの手順を工事職員が共有しました。またタイルを剥がして、どのぐらい打ち込みタイルが躯体とくっついているか、食いつき強度をみるための引っ張り強度試験も行いました。

一番悩ましかったのがこのタイルなんですけども、この外壁のタイルの製作に当たって、オリジナル・タイルとの色合いを合わせるために、試作を何回もやり直しました。初期は単窯で行っていたと思うんですが、トンネル窯の時代になって他の製品も一緒に焼いていくために、東京都美術館だけのタイルをある程度の温度で何時間も焼くということができなくなったんですね。それで5～6回試してやっても、どうしても同じ色に合わない。それで、結局は単窯で出来るところを探しました。単窯の場合には、熱するまでの時間、冷ますまでの時間をみるので、納期に時間がかかるんですけど、なんとか同じ色合いに合わせる事ができました。

□打ち込みタイル工法の復元
①色合いの再現・手作業による成形加工



見本焼きの確認会

成形工程(オサ加工)

□打ち込みタイル工法の復元
③コンクリート打設



モックアップによる施工確認の実施
タイルと鉄筋の間には竹を挿入し、コンクリートを充填



高圧マルチの施工状況確認



アクリル板型枠による、開口部周りのコンクリートの充填状況確認

□打ち込みタイル工法の復元
②打ち込み施工



壁面の型枠にタイルの裏面側を正面にして積み上げて、打ち込みブリックと躯体を一体化

□打ち込みタイル工法の復元
④引っ張り試験



既存タイル引張り試験
0.6N/mm2以上



既存タイルを剥離して、コンクリートの充填状況を確認

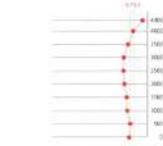
コンクリートを流し込み、タイルと一体化させて耐久性を向上

□電気設備の全面更新
③照明環境 企画展示室照明



主な改修内容

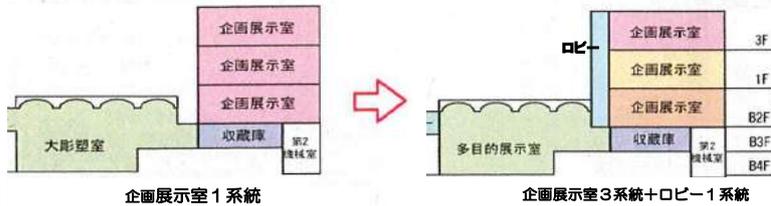
企画展示室は基本的にはスポット展示が多いが、印象画やコンテンポラリーにも対応すべく、公募棟特設LED電球ウォールウォッシャー及び、ベースライトとして、光熱天井を採用し、展示の自由度に対応した設計となっている。調光は種々パターンがあり、パルスシステムでその場で展示環境の設定ができるものを採用した。



企画展示室照明：WIP (W) LED 22W



昨今、その打ち込みタイルは剥がれたり壊れたり、あるいはクラックが入ったりして直すことが多いんですけど、同じ色に焼く土がない、焼ける釜の温度も調整できないということで、非常に難しい状況になっております。この東京都美術館では単独窯を見つけてなんとか焼くことができたけど、もうこれは今後難しいかなと思っております。



使い方の可能性が広がる展示環境の整備

企画棟の展示空間の照明ですが、天井をベースライトにして、壁面にはいわゆるウォールウォッシャーライトというものを使って、さらにLEDのスポットライトでエリアごとに照らすことができるようになりました。空調に関して、前の展示室は三層1系統だったんですが、フロアが大きくなって、いろいろな展示にも使う可能性やロビーから自由な動線もできるようになったので、ロビーも含めて4系統と展示室を3系統にして、今度は天井高も高い、広々とした展示環境になりました。

さらに公募展示棟の方は、前は4棟が並んで同じ面積で、同じ形状で雁行した単位空間の連続でした。この時代は4つの公募団体が同じ条件で、地下のレベルから入ったら、縦の一、二、三層がひとつのグループだったんですね。ですから4棟全部同じ条件ですので、空調も4系統しかなかったんです。ところが大きな団体は国立新美術館の方に行きましたので、ここではいろいろな小規模の公募団体が増えて、これを自由に使うということになったので、それぞれ横の並びでも展示ができるように、この4棟の空間が1、2、3、4、5、6の展示空間に分かれた。そこで、空調を6系統にするため機械室の空調設備も大規模な改修になりました。

改修前：縦につながる独立動線



改修後：横につながるロビー動線



□電気設備の全面更新
③照明環境 公募展示室照明

主な改修内容

公募展示室は多数の作品を展示するため、空間の広さを確保し、自然採光が不足しないようLEDベースライトとスポットライトを併用し、展示の自由度に対応した設計となっている。調光は種々パターンがあり、パルスシステムでその場で展示環境の設定ができるものを採用した。

■空調改修



改修前：縦系統×4系統 改修後：2室毎系統×6系統



公募棟の場合にはいろいろな展示会があります。極端な場合としては、4.8mの天井の高さに、二層、三層の展示を並べてやるような公募展があるんですね。そうすると、この上の壁面から下の壁面まで同じ照度になってないと展示に影響します。当初はなかなか照明の具合で上の方がちょっと暗かったのが、このウォールウォッシャーライトで綺麗になりました。それから展示照明もLEDになって、全体がほぼ均一にできました。

3つのレストランとカフェにミュージアムショップの充実

さらに今日の美術館において大事なのが、レストランとミュージアムショップの充実なんです。レストランは、前は1階にしかなかったんですけども、改修では二層にして、この上を大きなレストランにしました。さらにこの下の階にカフェをつかって、文化棟の方にもちょっと高級なレストランを設けて、レストランが全部で3つになりました。

それからエントランス・ロビーにあった、昔は本当にちっちゃなミュージアムショップも、ラウンジを広げてそこに大きなミュージアムショップを設けました。

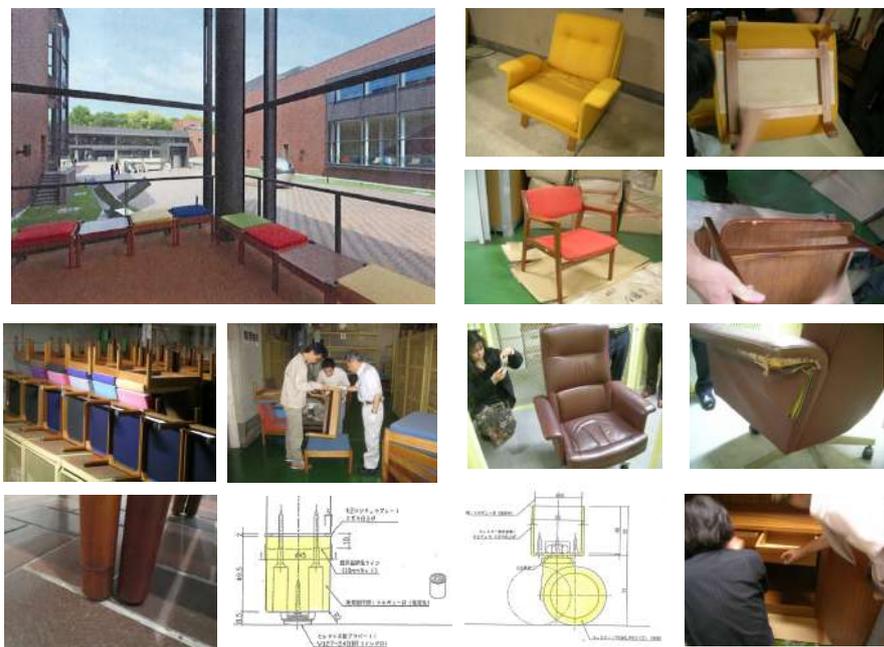
バリアフリーという問題に関しては、改修前は全部で13基あったエレベーターを、改修においては全部撤去して、同じ箇所にさらに増やして、外部にも設けるなど、全部でエレベーターを20基に、エスカレーターも13台に増やしました。そしてリフトも2台あり、改修後は外部からも直接エレベーターで、もしくはエスカレーターで1階まで行ける、ロビーまで行けるということになりました。

前川オリジナルデザインの什器、家具、備品も丁寧に補修

特に前川の建築の改修では、什器、家具、備品についても非常に丁寧に補修が行われています。この東京都美術館では、スツールとかいろいろ家具があるんですけども、これも全部既存のものは補修して使うということが前提になりました。

館長室の机、椅子、テーブルもだいぶ傷んでいたんですが、全部工場に持って行って、塗装を剥がして補修して、もう1回使う。

改修前：1階にレストラン 改修後：増床して2階にレストラン、1階はラウンジ



特に展示室に使われているスツールは、200台ぐらいあったんですけど、全部工場に持って行って、欠けている部分やクッションのヘタリも全部剥がして新しくいたしました。そして、この時代の座面の高さは40cmだったんですが、今は身長もかなり大きくなったということで、45cmに変えたんです。既存の椅子の脚の下、このところに5cmの脚を付け足して、目印で真鍮のリングを付け

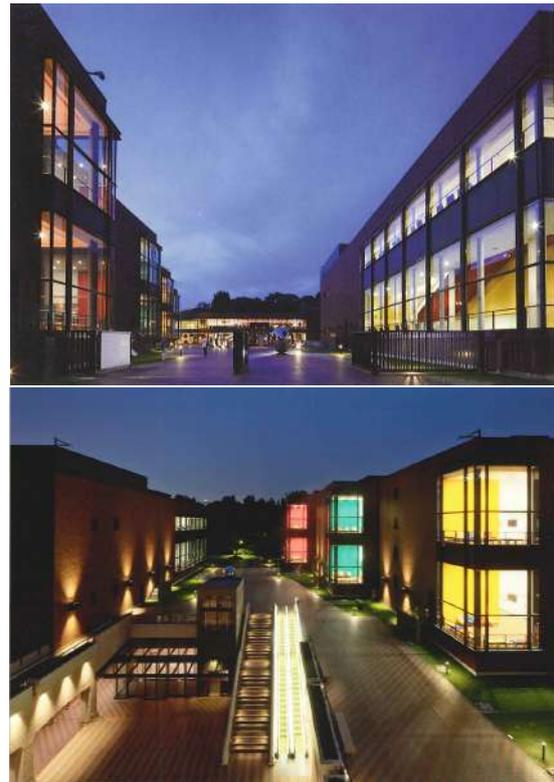
て、既存のスツールを改修しました。さらに、45cmの新しいスツールも作りましたが、スツールに座るときによく見ていただくと、脚元に真鍮のリングが下から5cmぐらいに付いているのは、全部、もともとあった椅子を改修して作っている椅子になります。ぜひ見てください。ですから、都美術館のほとんどの椅子は、新しい椅子というものは少なく、竣工時の椅子をそのまま補修して使っています。

この埼玉会館を改修した時にも、同じように古い椅子をそのまま改修してクッションや傷んでるところを直しています。

前川建築を生かし続ける7つのデザイン・ボキャブラリー^(*7)

以上、美術館の改修事例を通じて、前川建築を継承するということがどのように行われてきたかということを紹介しましたが、その心、改修の気持ちは、前川建築の手法を用いて改修を行い、建築の持つ魅力、あるいは理念とか空間の持つ佇まいや空気感、そういうものは変えないという思いでずっとやってきております。そこで、前川建築の手法って何？っていうと、「7つのデザイン・ボキャブラリー」ということに尽きるわけです。それを踏襲しながら、改修に当たるといことになります。

最後に、これは夜景です。これが企画展示、常設展示、正面の食堂、反対から見ますとエスカレーターがあって、こういう色合いが見える。この手前にブルーの壁があるわけです。僕らはこれを揶揄して、山手線とか東急線とか中央線とかっていう色だねって言ったら、そんなことはないと言っておりましたが、そういう感じもしないではありません。



前川建築には人の心を通わせる文化の営みが宿る

最近、朝日新聞の8月10日の「日曜に想う」の欄で、コラムニスト吉田純子さんの「自問を促す闇、つくり出す光」っていう文章を目にしたんですが、舞台照明家の吉井澄夫さんが、闇ということを非常に大事にする照明家で、闇があるから気づきができ、そこに人の心を慮る人間性というものがあると。これを例に、昨今のSNSの刺激的な、しかしのっぺりとした効率優先のキャッチフレーズが多い状況に対して、社会が気づきを持ってない、人の心を蔑ろにする危険性を指摘しているんです。

この文章の最後に、東京文化会館と京都会館のひさしのもとに集まる人々の出会いをさりげなく前川がつくっていると書いていて、「あ、そうか。前川建築を継承するというこ

(*7) 7つのデザイン・ボキャブラリー：「3つの変遷」「単位空間の増殖」「平面計画のムーブメント」

「小都市をつくる」「環境・風土と馴染む」「素材を活かすディテール」「前川カラー」

：当建築セミナー第7回「前川建築と埼玉会館の心地よさ」の講演記録P.19「前川建築の7つのキーワード」に、橋本功氏の解説があります。 https://www.saf.or.jp/saitama/pdf/library/library07_20201107.pdf



とは、文化を継承することに等しい行為なんだ」ということに、僕は逆に気づいたわけですね。そして、この前川さんの言う「ひさしがあるところ」は、松隈君の話にもありました、いわゆる前川の空間の都市とのつながり、あるいは建築を通じて人々に、散策をする場とか、語り合う場を提供する。

前川のデザイン・ボキャブラリーの中の小都市をつくるというのがありますが、これをもうちょっと難しい言葉で言えば、アンリ・ルフェーヴルというフランスの哲学者、社会学者の「都市的なるもの、都市というものは生産ではなくてつくっていく、制作していくものだ」という都市空間についての話があるんですけども、都市的なるものというものに、ものすごく通じた話ですね。建築に対して、都市というものに対して、どれだけ開いていくか、これがとても大事なんだとも言えると思います。それが前川のデザイン・ボキャブラリーの「小都市をつくる」ということにつながっていくと感じております。

「私たちの建築」は、みんなで育っていくということの中に、前川の建築の素晴らしさがあらためてある。今日の河野さんの話も含めて、いろいろな市民の人たち、あるいは使う人たちがどんどん広がって、埼玉会館を育てていってほしいと同時に、一緒に育っていくという気概が生まれれば、非常に嬉しいことだと思っております。

どうもありがとうございました。



第3部 トークセッション

松隈 洋・河野 佑美・橋本 功・小澤 信子（進行）

専門家10人の話より一人ひとりの市民の口伝えが建築を生かす

小澤（進行）：第3部トークセッションに移らせていただきます。まず、今日ご登壇いただいた御三方に、本日のご講演を振り返って、特に印象に残っていることとか、まだちょっと付け加えたいなということございましたらお伺いしたいと思います。

河野：私は今日は建築の話というよりは、私が市民の皆さんとどれだけ都美で楽しんでいるかっていう話をしたのですけれども、松隈さんと橋本さんのお話の中で、前川國男は常にそこに誰かがいる建築を大事にしていたんだよということを久しぶりに言葉で聞いた時に、その誰かのひとりに、私ととびラーたちと、それからそこにやってくる皆さんとが、少しでもなれてたらいいなって改めて思いました。

橋本：僕もここで前川國男建築セミナーをやって、設計者側から、建築はこんなに素晴らしいんだということを話をしてきたんだけど、実は使ってる人、利用している人がどれだけそれを楽しんでくれるかということが、やはり一番大事なことなんだと。建築の専門の人やいろんな人が10人話すよりも、ひとりの市民の人がそれを口伝えでみんな「大事だね、いいね、楽しいね、面白いね」って、今日の河野さんの話みたいなことがどんどん広がっていくことが、結局はその地域にとっても、建築にとっても、とても大事なことなんだということに、僕もこのセミナーを13年やって、ここ2～3年の中で気づかされてきた。今日の河野さんの話を聞いて、僕は素晴らしいと思った。こういう活動が各建物、地域の中で口伝えにみんなに広がっていけば、一番それが力になる。そうした活動の広め方をやはりしていくことが大事だなということをしみじみと。今更ながら申し訳ございませんが、とびラーの皆さんの活動に改めて敬意を表したいと思いました。

小澤：ありがとうございます。本当に、建物を生き生きと使うということ、そして愛情を持ってというところを、すごく今回も心に響きながら聞いておりました。

会場の皆様からも、ご意見とかご感想でも結構です。ございますでしょうか。

建築物の写真撮影時の配慮と心得

参加者A：4年ぐらい前に展覧会を見に行った際に、いい機会だからと、正面出たところで写真を撮りました。そしたら、警備の方が、あなたは写真を撮る許可を取りましたか？というご指摘がありました。都美術館ではそういうことが条件になってるのでしょうか。

河野：まず、当館へのご来館ありがとうございます。それから、うちの職員が強い口調で注意してしまったこと、この場を借りてお詫びさせていただきます。申し訳なかったです。

東京都美術館での写真撮影っていうのは、すごく慎重に行ってもらっています。というのは美術館の去年1年間での来館者数は、だいたい170万人くらいなんです。その中で海外の方もおられたり、いろんな事情を抱えられているお客様も多いので、その方が写り込むということを結構みんな気にしているんです。ですので、正面玄関というたくさんの方が行き交う場所で撮っていると、やっぱり職員としては、特に受付周りの警備スタッフは心配になってしまうんですね。それでまず、あまり人がいない時に撮っているのは見逃してほしいって職員も言います。だけれども、人がいっぱいいる時はちょっと配慮してもらえるように伝えてくださいねっていうのは言っているのですが、写真撮影を全面禁止しているわけではないんですけれども、かなりの配慮をお願いしている、そんな状況にあります。館に戻りましたら、今日こういう話を受けましたよっていうのを職員、スタッフと共有します。

松隈：例えば、美術館でスマホ撮り放題みたいになっていると、本来、美術に会いに行ったのに、カメラの音ばかり聞こえてるみたいな、美術そのものに入り込めなくなっちゃってる現実もあると思うんですけど。

1994年、前川が亡くなってたけど、埼玉県立博物館を見に行きたくて行ったんですよ。そしてその中庭で写真を撮ってたら、職員の方が飛んできて「写真禁止ですよ」って怒られた。それで、さすがに前川事務所の間人ですって言えなくなっちゃって困っちゃったんですけどね。そういうこともありました。ただ、それは管理者としてその敷地内で、無断で写真撮るなっていう規制を多分かけてたんだと思うんですけど。

橋本：写真で僕らはいつも言われるのは、建築の写真を撮る際は、肖像権や意匠権、著作権の問題があるから、勝手に撮るなっていうのが原則だと。スナップ写真を撮っている場合は問題ないだろうと判断できるんだけど、建築の写真を撮るとなると、注意する原則があると考えた方がいいと思います。新聞記者とかテレビ局とか報道の世界では、テレビで流す映像や写真の場合には、著作権、肖像権への配慮が厳しく求められるようになっている。海外に行くと、勝手に撮ると、場所によっては逮捕されます。そういうことが日本でも徐々に起こりつつあるという状況は意識しておいた方がいいかなと。僕らも写真を撮るときには、必ず許可をもらって撮るようにしております。

松隈：僕も今みたいなうるさい話がない時期に、たくさん写真を撮ってるんですけど、一番楽しいのは、前川の建築と人がどう触れ合っているかを記録したいんですよね。でも例えば図書館も、実は休館日でしか撮らせてくれない。本当は建築が人間とともにどういうふうなそこで生きてるのかを撮って、やっぱりいい形で使われてるよねっていうのを記録したいんだけど、それができなくなっちゃってる不自由さが今はありますよね。なんかそこがすごく残念で仕方がない。

小澤：建物もやっぱり市民のオアシスとして、多くの方に来て、楽しんでくつろいでいた
だきたいと思いながら、そういった肖像権の問題というのもあると思うので、そこは管理
者の私としても、伝え方を工夫するとか、気をつけないといけないなというのを思いまし
た。

建物を愛でる体験者が増える仕組みこそ前川國男の見たかった風景

松隈：河野さんがさっき発表されたことですごくいいと思ったのは、つまり、僕たちはそ
の建物に美術展を見に行ったり音楽を聴いたりするお客さんとしてその建物に一瞬だけ有
料で触れることはできるんだけど、その建物を拠点にして、その建物になじんでいく、ま
さにハマっていく時間というのは、今まで全く回路を持たなかった。そこで、それを始め
てくださった。なおかつ、そういうことを期待してた前川が見たかった風景っていうか、
人々のところにその建物が根付いていくっていうことを体感してくれる人が増えていく
っていう、その仕掛け自体が、実はものすごく貴重だなとっていて。

とびラーの人たちのそういう経験って、実は僕は日常であんまり持ってないんですよ
ね。馴染みの場所で、自分たちが拠点にして、さらにその建物の良さをみんなに伝えるよ
うな役割で、より親しくその建物と触れていく、手で触れるようなものにしていくとい
う経験は。市民社会にとって一番根底にあるはずなんだけど、そういう回路はなかったよ
うな気がするんですよ。だからとびラーの方で、そういう経験を話してくださらないか
なってちょっと思ったんですが。

小澤：ありがとうございます。埼玉会館の見学ツアーも、2021年から開催して5年目、実
は東京都美術館のとびラーの卒業生の方が、企画書を持って当館に来てくださいまして、
そこから始まったんです。もう今となつては、埼玉会館の魅力発信にとってもなくてはな
らない、かけがえのない方たちでして。今日、都美のとびラーの方もいらっしゃる
ようなので、もしよろしければお話聞かせていただけますか？

大ホールの舞台で音楽家としてスタート、最後はここでリサイタルを

参加者B：今日は貴重なお話をありがとうございました。私は浦和在住で、とびラーでは
ございませんが。

私は浦和で生まれて、浦和で育ちまして、音楽を、ピアノをしているものですから音大
を出た時に、埼玉会館がちょうど埼玉会館主催のオーディションというのを始められて、
私はその2回目のオーディションを受けて、ここのまさにこの会場のホールでピアノを弾
かせていただきました。それは新聞にも載りました。その時に一緒に受けた日高出身の方
は、今、芸大関係の仕事でピアニストされてますけれども、そのような登竜門という機会
を埼玉会館が授けてくださったことは大変ありがたくて。

そして海外駐在もいろいろしましたが、今、浦和に住んでおりまして、いろいろなホー
ルや建物を見ても、埼玉会館は大好きです。東京都の文化会館がございませぬけれども、あ
の小ホールの方はちょっと石の建物のように響きがまた全然違います。前川先生のこの

1300ぐらいのキャパでウッディな大ホールの建て方が大好きで、弾かせていただいたこともございまして、今年の秋も小ホールで定期演奏会をさせていただくんです。

松隈先生のお話、大変感銘しました。人は病院で生まれて、学校やホール、博物館などの建物によって育って、そして最後に火葬場で焼かれるっていうお話を伺ったものですから、あと何年生きられるのかしらって思い、これからのライフワークというのも「そうか！この大好きなホールをひとりで使って、そして思いっきり、どなたかにどんなことを言われようとも気にせず、自分だけのリサイタルを開きたいな」ということを先生から授けていただいたような気がしました。本当にありがとうございました。

小澤：ありがとうございます。大変温かいお言葉を頂戴しまして、嬉しく拝聴いたしました。

知らず知らずのうちに前川國男の心に・・・

参加者C：ちょっと恥ずかしい話なんですけれど、今日の前川先生のお言葉、ひとつひとつを説明して下さったことで、ひょっとすると先生は私のためにここ建ててくれたのかなと思いました。実は私、埼玉も浦和も関係ない人なんですけれども、52年前、多分建ったばかりなんだろうね。18歳のデートの待ち合わせ場所がここでした。それでどういうわけか埼玉に、浦和に住んでるんです。

昨日も実はここの会議室で勉強会があったんですけど、ここの小ホールで500人のイベントを開いたり。音楽会とか講演会など、なんやかんや言いながら50何年、来ています。すごくあったかい感じ。それと大宮公園にある博物館にも何度も行ってるんですね。前川先生が建てたとか全く知らなかったんですが、いっぱいいろんな建築家の建物があるんですけども、同じ建築でもやっぱりここは前川先生の心がすごく伝わってくる。そこが違うところなんだなって。だから何度も来てたり利用したり、ハマってしまったというところで。前川先生、ありがとうございました。

小澤：ありがとうございます。先ほど松隈先生の話でも、現在の課題というようなところもありましたけれども、今のようなお話を伺うと、未来は明るいんじゃないかっていう感じてしまうんですが、いかがですか？

松隈：この間、弘前でちょっとワークショップをやって話したら、弘前在住の方が「私は絶対、桜の季節に死にたいんだ。弘前の斎場は桜が綺麗なので、その時期に私は死んで、あそこで焼かれないんだ」って話をされた方がいらっしゃって。そこまで言われるようなものをつくったのかなって思いがありましたね。なんかすごく嬉しくなりました。

小澤：今のお客様が、私のために建ててくれたんじゃないかってお話がありましたけど、とびラーの皆様とか、前川建築が大好きっていう方みんな、ひょっとしたらそう思ってるんじゃないかなと思いながらお話を伺ってました。ありがとうございました。

弘前市民の前川LOVE

参加者D：今、松隈先生から弘前のお話がちょっとあって思い出したんですが。私、去年の暮れから今年にかけて、実は若い弘前市の市役所の営繕課に勤める方との出会いがありました。鬼頭梓先生の日野市の図書館で、その講演会で初めて出会いまして、帰りに新宿まで楽しい話をして「今年、弘前に絶対に行くから、その時また会おう」と。

彼は、弘前で生まれ育って、そして前川さんの建築に感動をして、京都まで行って松隈先生の大学、研究室で学んで、また自分の故郷の弘前に帰って、市役所の営繕課に勤めている。弘前に、こんなに自分の街に愛情を持って、そして誇りを持って頑張ってる若い営繕課に勤める職員がいる。これはもう素晴らしいなって、僕は思いました。市役所も前川先生の作品で市役所に行くと、ねふたの大きな絵と一緒に、前川さんの大きな顔写真があるんです。またエレベーターホールの乗り場のこのボタンを押すところに、普通は「本館」「別館」しか書いてないですよ。それが、「前川本館」「前川別館」って書いてあるんですよ。これはやっぱり半端じゃないなと思って帰ってきました。

小澤：貴重なお話をありがとうございます。

ル・コルビュジエとサン＝テグジュペリと前川國男の縁

参加者E：松隈先生に、コルビュジエとサン＝テグジュペリが一緒の飛行機に乗って、その時のパイロットが実は彼だったという話を、今回初めて聞いたんですね。そのサン＝テグジュペリとコルビュジエはどのような関係にあったのか、もうちょっと詳しく話をしていただければ大変嬉しいんですけども。また彼が書いた文章とどういう関係で造形ができていったかとか、そういう話を聞けると大変嬉しいです。

松隈：ごめんなさい。これ、僕が新聞の書評を書いたコルビュジエの評伝、ジャン・プティって人の書いた本（「ル・コルビュジエ みずから語る生涯」）の中に出てくるんですね。そこには、本当にそのエピソードしか書いてなくて。例えば、新聞記者時代のジョン・スタインベックにインタビューを受けたこともあるとか書いてあったり。結構、コルビュジエっていうのは、あの時期にやっぱり非常に注目されていたので、どうもいろんな人につながってみたいなんです。

実はコルビュジエは、自分の建築のことを考えるのに、フォードがつくった大量生産の車と、それからちょうどライト兄弟が飛行機を飛ばして空を飛べるようになっていたり、あるいは大型客船が海の上を航行するようになっていたり、20世紀の新しい形が出てきたものに非常に影響を受けて、自分の本の中に全部、並べてるんですよ。だから多分、飛行機っていうものに対する憧れで。サン＝テグジュペリはこの間も、「100分de名著（Eテレ（月）午後10:25）」で話が出てましたけど、本当にライト兄弟が飛ばしてすぐに郵便飛行機とか旅行用の空路が開かれていって、フランスからアフリカまで飛んでいくっていう空路ができていって、すごいですよね。最後は彼はナチスに抵抗して、偵察機で結局行方不明になっちゃうわけですけど。だからおそらくなんらかの接点を持っていたんでしょうけど、

少なくともアルゼンチンに行く時に彼がコルビュジエを乗せたということが書いてあったんですが、それ以上のことは実はわからないんですね。

確か、コルビュジエの書いている本にも、サン＝テグジュペリの書いている本の影響を受けてるってことも書いてあった表現がありましたので、やっぱり何らかの交友の関係があったと思うんですね。だから、そういう同時代っていうのは多分あったと思います。それ以上のことは、むしろ、サン＝テグジュペリの研究者がその辺のことを知っている人がいるかもしれないんですけど。

ただ、前川國男もどうもたくさん読んでたようで、出典がわからないんですけど、多分、東京文化会館ができた頃に、「サン＝テグジュペリは、デザインするってことは、何かを付け加えていくことじゃなくて引いていくことなんだよって言うけど、あれはすごく大事なことを言ってるよね。つまり、どんだんいろんなものを付け加えていってるんじゃないかって、本当に大事なものだけに絞っていくっていう作業の方がデザインすることなんだよ」って言っていて。それをさっきお話ししたような平凡な材料で非凡な結果をつくるっていうことにもつながっていく。

だから前川さんの建築で晩年になるに従って透明感が増している感じがするんですよ。デザインのいろんな要素とか素材とかが、東京文化会館だとてんこ盛りになってる感じがあるんですけど。埼玉会館とか埼玉県立博物館とか熊本県立美術館になっていくと、本当にどれも同じ素材で、土に還る素材だけで出来ていて、決して奇をてらったり、「どうだ」っていう身振りすらなくなっている。でも、そこに行かないとわかんないような温かみがあって、包まれてるっていう、そういう建築を最終的に目指してたのかな。なんかその一番根っこのところで、もしかするとサン＝テグジュペリの思想も入ってるような気もしないでもないっていう感じがします。

小澤：ありがとうございました。本当に興味深い逸話だったと私も思います。皆様、ご登壇いただいた先生方、ありがとうございました。

